信ちゃんの昔話　第十部

ジャングルと移民

沼田信一

信ちゃんの昔話（第十部）

ジャングルと移民

沼田信一著

「ジャングルと移民」の発刊を祝して

パラナ日伯文化連合会
会長　嶋　田　巧

「信ちゃんの昔話」もこれで最終編との知らせを受けて、何となく心淋しい思いで「ジャングルと移民」。ジャングルで戦った、大先輩沼田信一氏の移民の姿を想像して楽しみに発刊を、お祝ひ申し上げます。

信ちゃんと申しますと、いかにも若年の感じがいたします

が、実は八十三才の高齢なのです。
若々しくて行動的で日系社会におかれては、パラナ日伯文化連合会教育委員長並びに県人会モラロージ等と色々な公職を兼ねてご活躍されておられ、その上に、移民の足跡を書きつづけて十編（十冊）こんなに多くの昔話を忘れずに文章に書き表す記憶力のすばらしさに、私は、ただ驚いているのです。
私の知人の日本国の「信ちゃん昔話」のフワンの皆様もこれで最終編と知ったなら、もっともっと書き続けて下さいと願う事でしょう。

ブラジル国へ日本移民が入植して、九十四年の歳月が立っていますが「信ちゃん」沼田信一氏は渡伯（六九年）移民の一番の苦境時代を経験し、体験した尊い記録者と言っても過言ではないと思います。現在では、各家庭にも一世の昔を知り、話をする先輩も少なくなり、家庭におかれても、昔の移民悲話の話などしてもあまり興味を持たない若い方もおられるでしょう。
でも笠戸丸以来の歴史を手短に浅くても良いから、三世四世へせめて、我が家のルーツ、先祖は何県から何時頃ブラジル国へ移民してきて、現在のよろこびをどの様にして手に入れたのでしょう。学校では習う事の出来ない移民の歴史を「信ちゃんの昔話。」から教えていただこうではありませんか。
貧のどん底で食事にも事欠き病気しても医者にも行けず不

安を覚え薬草で済せ上の兄姉は学校にも通へず、親の手助けに明け暮れし、せめて弟妹達にでも学問をと念じ、今では立派な社会人として、地位もあり、教養も身につけた、日系、三、四世も数多く居りますが、その蔭には四苦八苦の中で子供を育てた先祖の貧しくツギハギのシャツと半ズボン、ハダシでの通学のなつかしい思い出も恥じとは思わず正々堂々と「信ちゃんの昔話」で移民九四年の歳月の永きを、ことこまやかに書き続って下さった、御苦労を心から尊敬する私です。

パラナ日伯文化連合会では、パラナ州ローランジヤ市に「日本移民公園」に移民七〇年祭記念事業として設立された、移民資料館も長い歳月の間には、いたる所に雨もりや、裂傷が入りましたので思い切って改造、増築に取り組んでいましたが、昨年六月十八日移民入植祭には無事落成式を迎える事が出来ました。

その蔭には、パラナ日系子孫のなみなみならぬご協力とご共感があったればこそと感謝申し上げご高齢にも、かかわらず日系地城七二地区の支部を訪問し、説明しながら募金の為にご尽力下さった沼田信一氏に、パラナ日系人の皆様に変り厚く厚く御礼中し上げて「信ちゃんの昔話」の最終編の完結を心よりお嬉び申し上げ今後共ご健康に注意され、ご活躍を祈念いたします。

ジャングルと移民の発刊を祝して

パラナ日伯文化連合会
名誉会長　福　島　正　登

沼田信一氏の　（信ちゃんの昔話）　も、第十部のジャングルと移民の、発刊に当りよくも、十部まで発刊されたと、驚く者であります。八十余才の沼田氏が、よくも此処、五ケ年の間に、移民と切りはなせない事を、書かれ過去の思い出を浮べながら、身にしみるものがあります、沼出氏の移民物語りは、二世・三世・四世と次世代の者に残す、歴史であります。二世の方、移民生活を味合った人も、たくさんおられますが、三世となると、移民と云う言葉さへ知らないでしょう。

私は日本の友人に、一部二部を送った処、続編を送って呉れと云はれ、八部まで送りました。

此の度、第四回福岡県海外交流世界大会が、日本で開催されますので参加する為、十月六日ロンドリーナ空港より、出発しました。其の時、沼田氏が見送りに来て下され、第九部が発刊出来たので、日本に持って行ってくれと云はれ、日本の友人が喜んでくれると思ひ感謝致しました。

よくも此処五年の間に、沢出の昔の事を思ひ出されたと、感心致します。第十部で完結と申されましたが、まだまだ元気ですので、続けて頂きたいと思ひます。

今後益々健康に、充分に気を付けられ、益々のご活躍あらん事を、祈って「ジャングルと移民」の発刊のお祝ひと致

します。

二〇〇一年十月吉日

序　コロニヤでは面白い本だ

ブラジル・モラロジー研究協会理事長
モジ・ダス・クルーゼス・イピランガ病院院長
森　昇

コロニヤで発行されている本としては珍しく、面白く読ませてくれる、信ちゃんの昔話も、いよいよ最後になった、というので淋しい思いをしている。

第九部では、五十年来の医者である、私でも面白く読ませて頂く様な、ブラジルの風土病に付いて書いて頂いた。

開拓当時の奥地には、現地人に多くのトラホームや天然痘の患者のいた事を思い出させてもらった。

第十部では、二十二万人そこそこの移民で、百万アルケールのジャングルを開拓していると、誰もが気のつかなかった、日本人の開拓した植民地の数を調べあげて、証拠立てている事は、沼田君らしい物事に対する、緻密（ちみつ）さで感動させられる。

従って第十部で終りつというのはどうも淋しい。

日本のシネマの様に前編の終りという事にして、一休みして、又、後編を書いてもらいたいものと思う。

氏は八十三才の高齢で我々のモラロジー団体の役員を勤めながら、パラナ日伯文化連合会の教育委員長を勤めて居られるという。

氏が元気だからと、皆んなで重荷を、負わせ過ぎているのかも知れないが、健康に気を付けて、信ちゃんの昔話はもう少し続けてもらいたいものと思う者です。

序

パラナ州日本移民史料館
館長　谷　川　悟

「谷川先生この原稿を読んでみて下さい。」分厚い原稿の束、それは信ちゃんの昔話シリーズを締めくくる第十編「ジャングルと移民」の原稿であった。

第九編の「風土病と移民」の時に前書きを頼まれ、驚きと感激の気持で筆を取らせていただきましたが、この第十編の原稿を読ませて頂き、又々感動を新たにしております。

自分の歩んで来られた過去を真摯に見つめ直し、奢りも誇張も無く淡々と、そしてむしろ楽しそうに文章にまとめられているのです。普通、開拓の昔を語る文章を書く場合、そのつらかった面ばかりを強調して表現しがちなものですが、沼田さんの文章には、そうした暗さを全く感じさせない何かが有るのです。したがって読み手の側も、読み始まったらその

面自さに引き込まれ、つい一気に読み通してしまうと言う楽しみが有るでしょう。

「私の最後の作品です。」と、沼田さんはおっしゃっていますが、そのような寂しい事を言わずに、これからも益々面白い作品を発表して下さることを望む一人です。

沼田氏は聞くところによると、八十三才の高齢との事ですが、パラナ州日伯文化連合会の教育委員長としても、モデル校の責任者を勤めて居られ、その方面の為に教材にと、教育カード、「移民懐かしあいうえお」。を発行、学生間に面白く遊びながら言葉を覚える様にと「教育かるた」 の製作、その他、八十才の老人とは思われない活躍をして居られる方ですから、他の方面に手が廻らないので移民の昔話を十冊で諦め切ると言われるのでしょうが、何ともこれが最後かと思うと、残念な気がしてなりません。

私がブラジルへ来てからの二年半、それこそ親子のように接してくださる沼田さんには感謝の言葉も持ち合わせません。どうか御自愛なされ、更なる活躍を期待して止みません。

序

沼田信一

いよいよ第十部の編集に取りかかる事になって、何を主体にして書いたら良いかと色々考えさせられたのでした。

第一部をカフェーと移民と題して発行したが、この題は製本する段階になって、マンガ家で文筆家の牛窪氏がブラジルの事だから、「カフェーと移民」として出したが良いと言われて命名したもので、内容にカフェーの事についての文は少なかったので、もう一度カフェーに戻ってみようか、とおもったり、一九三〇年代四〇年代の綿景気時代、即ちオーロ・ブランコ（白いお金）時代に、おおむね二ヶ年の借地料免除の条件で、あのうっそうと繁茂していた原始林を切り倒して行った、多くの移民の姿を、何んとか書いて見ようかとも思ったり、迷っていました。

ちょうど昨年の四・五月頃でした。日本人がどの位の面積を開拓したかという事は、日本人の開拓した植民地の数を調べると、相当確実な実態を知る事が出来るという事に気が付きました。

それで、早速取り掛ってみると、三百から五百位と予想した植民地の数が、忽ち五百を突破し九月半頃に一千に届き私も驚かされましたので、早速クリチーバ総領事館に届け、尚捜査を続けていますと、四月に千五百を、五月に、千七百を越しましたので再び整理致しまして、六月の移民の日の集りに、第一回の公表をし、私の昔話の第十部はこれを発表する

に限ると決定した次第でした。
それからの調べで今では植民地の数も二千を越しましたので、移民の開拓した面積は百万アルケールス（二百四十二万町歩余）を越すであろう事が判って来ました。
そしてその面積を移民の人数に割り当てて見ると、婦女子も老人も赤ん坊も平均にして一人日本面積にして十町歩を越す事になります。
それでは何が移民にその様な大きなエネルギーをおこさせたのでしょう。日本へ帰えりたい、帰えらなければ…の望郷の一念、それより外にないかも知れないのです。
それが、次第に『住めば都』で、此の国に落ちつく事に変ってくるのでした。

では本文を読んで頂く事に致しましょう。此処に至りまして、誠に残念な事は私の本を一段と盛り上げて下さっていましたマンガ家の牛窪氏が亡くなられた事です。何枚かは画いておいて頂いた物も有りますが大変淋しい事になりました。氏も御老年の方でしたから致し方の無い　事で、唯その冥福を祈るばかりです。
牛窪様長い間楽しませて頂いてどうも有難うございました。

目次

序　「ジャングルと移民」発刊を祝して　……嶋田　巧
序　ジャングルと移民の発刊を祝して　……福島　正登
序　コロニアでは面白い本だ　……森　昇
序　……谷川　悟
序　……沼田　信一

第一話　ジャングルと移民　一
第二話　〃　二
第三話　〃　三
第四話　〃　四
第五話　〃　五
第六話　〃　六
第七話　〃　七
第八話　〃　八（移民の統計）
第九話　〃　九
第十話　米相場と移民
第十一話　好運（一）
第十二話　好運（二）
第十三話　新らしい昔話
第十四話　体力　……
第十五話　ホーレン草　……
第十六話　始めての味噌造り

第十七話　臼堀り
第十八話　火事
第十九話　ペスカ（魚捕り）
第二十話　完成を見ない邸宅
第二十一話　ヒコーキとロンドリーナ
第二十二話　海岸山脈の先住民
第二十三話　子供が鉄砲を作る
第二十四話　トカゲ
第二十五話　入歯
第二十六話　トイレ
第二十七話　見合い
第二十八話　エウドラード
第二十九話　味覚
第三十話　玉味噌
第三十一話　バクチ的農業
後書き

第一話ジャングルと移民　一

移住すりゃ菓子屋の主人もやま　（ジャングル）　拓く
移住すりゃ学校の先生もやま　（ジャングル）　拓く
移住すりゃ巡査（おまわり）さんもやま（ジャングル）拓く
移住すりゃ質屋の旦那もやま　（ジャングル）　柘く
移住すりゃソバ屋の主人もやま　（ジャングル）　拓く

移住すりゃ呉服屋さんもやま　（ジャングル）　拓く
ブラジルはバンデイランテ　（開拓者）　が良く育つ

顧みて誠に不思議に思われる事は、ブラジルへ来た移民は、サンパウロ州でも、パラナ州でも、その殆んどが、人跡未踏の、昼尚晴き密林で有ったにもかかわらず、一部の者は、直接に、大方の家族は、一年或いは二年のコーヒー園での契約期間を終えると、この大密林の開拓に向った事である。

今頃、少しのレーニヤ　（薪）　を作ろうとして、直径十五センチ位の丸太をマッシヤード　（マサカリ）で切ろうとすると仲々大変で、「オーイ、モトセーラ（チェンソー）を持って来い。」と言う事になる。

それが、モトセーラの無いあの時代に、密林　（マット）には直径、五〇センチから、七〇センチ、中には一米或いは、それを越える程もある堅い木が沢山生えて居たのであるから、その開拓は全く大変であった。

然るに移民の大方はそのマット　（密林）　の開拓に突入したのであった。

それも開拓の無経験者が大方であるから驚きである。

移民は子供の教育の為に植民地入りしたのであるが、実際にはそればかりではなかったであろう。

開拓の一つは地主への最短距離でもあったのである。

大体の植民地の地代支弘いは、四、五年の年賦払いであったから、土地代の入れ金と、半年程の生活費があれば、地主

となって自分の土地に入る事ができたのである。
米の収穫は三月に殆ど終り、綿は五月頃までかかったが、終り次第引越しするならば、原始林の開拓はちょうど時期であった。カフェーの収穫で開拓にひまがないと思う時は、伐採だとか、始めの小屋立てを請負わせておく事も出来た。
古い畠で、米や棉の収穫した跡を、次年度の為に整地している間に、原始林に入植した人は、ジャングルの下草を、フォイセという鎌とマサカリを兼ねた様な道具で切り払うのであるが、下草と言っても、畠に生えるような草はなく、大木の下で大きくなれない細い木とか、木からブラ下がっているつるなどで案外はかどる仕事であった。
当地では農地の単位をアルケールという言葉で表わしているが、一アルケールは二ヘクタール四十二で、日本の坪でいうと、七、三〇〇坪強であり、二町四反余である。
此の一アルケールの下草刈りが、土地が良いと大木が有るので下草は少なくてはかどり、土地が悪いと、大木が少ないので下草は多くて手間がかかるのであるが、大体七、八人手間から十人手間位かかると下草は刈り終り、それから木を倒すのに、二十日程かけて、倒すので、一人で一ケ月通うと、大体一アルケール（二町四反余）の伐採が出来るのであった。
六月七月と二ヶ月の間に一人男で約五町歩、二人男が居れば十町歩近く開拓するのであった。
移民の大方はそれをしたのである。
私の家では、札幌市の中心部でお菓子やをしていたのであ

るが、四十九才の父に、十八才の兄と、十五才の私とで、着伯した年に、二町五反の開拓をしたのであった。又、此の仕事を請負う人が居たので、別に二町五反を開拓してもらった。これは時期が遅れていたからの事であった。

翌年は引越ししたので資金不足となり、自家労力だけで開拓を終えたのである。前年の経験から六町歩の開拓をし、十町歩余りの土地はその翌年早々に開拓した、三年目には近所の人のジャングルを七町五反開拓し、それを借地して計十七町五反の畠、それも倒した木がころがっている新開地を一つの機械も、一頭の馬も無しに、種を蒔き、草を取り、収穫の総てを手作業で、片付けて来たのであるから全くの驚きである。そしてこの三年間の収入で、初めの土地代を払い、更に五十町歩程の土地（森林）を購入する事が出来たのであった。

此の項の始まりに書いておいた様に、お菓子屋の家族も、学校の先生の家族も、おまわりさんの家族も、質屋の旦那さんも、そば屋の主人も、呉服屋さんの家族も、みんな、ブラジルに移住した日本人は、ブラジルに来ると間も無く、その九割九分迄の家族が、ジャングルの開拓に向ったのであるから、それも出来る筈の無い、無経験の開拓事業であるのに、それ程の不満も言はずに立ち向って行ったのであるから、不思議と言うより外に言葉はないのである。

それとも、日本人には、『ジャングルを開けば食べて行ける』と言う、農耕民族としての素質を体の中に持っていたのかも知れない。

それではこの話はここで終りとして、日本移民は、戦前、戦後を通じてどの位の面積のジャングルを開拓したものであろうか、その面積の概略でも知りたいと思う人々の為に項を改めて検討して見たいと思う。

第二話　ジャングルと移民　二

開拓「アッ！蛇だ」

開拓、開拓と言って、先輩移民は実際に何万町歩、何十万町歩拓いていたのか、という事になると、唯漠然とした数字では納得してもらえないであろう。

それにもっとも納得して頂くには、日本人が創設し、又、入植した植民地の数を調べるのが良いかと考えて、一昨年の五月頃から調査にかかった。

植民地には大小さまざまあるが、無理の無い標準と思って、一植民地、五十家族、一戸分として十アルケール（一アルケールは二、四二Ｈａ）単位と考えた。

そこで余裕の有る人は二戸分三戸分と買う人もあり、家族が小さいとか、経済に不自由している人は、一戸分を二人で分けて買う人も居たと考えるのが無理の無いところと考えて、植民地の数を調べていると、忠いがけない狂いが来た。

植民地の数は五百はあるまいと思って始めた調査であったが、忽ちの内に、それを突破して、七百、八百と判明して来たので、これでは一千植民地に届くかも知れないと張り切って捜していると、昨年の五月から始めた調査であったが、九月には早くも一千を突破する勢いである。

そこで良かったと気がついた事は、調査の途中で、これも植民地かも知れないと思わせられる不確実な表現のものはすべて没にしていた事であった。

例えば、〇〇〇に土地を買って入植した。又、△△△に土地を買って移った。私達はＸＸＸに移って開拓した。と、書いてある場合、この三ケ所も植民地であるかも知れないが、植民地と断定出来ないのではずしていた事である。

それでも、昨年九月に一千に届いた。それが年越しすると、正月休みの間に、一千五百を突破する事になった。

さすがに此処迄来ると洩れているものは少なくなって来た

のであるが、今、八月末では一千八百を突破しているので、私は、此の植民地数は二千に届く確信を持つ様になった。

そこで先輩移民が、開拓した面積の計算であるが、始めの項に書いて置いた、一植民地五百アルケールの計算にすると、実に百万アルケールとなる。更に、先輩移民は、一九三〇年代に入って、景気を出して来た棉作をはじめた。大地主が、牧場造成に苦心して居るのを知って、二、三年小作料の免除をしてくれれば、ジヤングルは此方が伐採して、最後の年には牧草の苗を植えてお返しするとの条件を出すと、我も我もと土地を貸してくれる人が出たので、此の様な条件でジャングルを伐採し、棉作をした量も植民地開拓の十％は確実にあろうと思われる。

又、移民も五、六年して、少し言葉も通じたり、此方の事情に慣れて来ると、植民地の土地は長い年賦の為に少し高いのが普通なので、植民地から余り遠くない処で外人の地主から直接買う人が相当に出てきた。

そして、その場合は、植民地と違って、少し広い土地を買う人が多かったのである。

こうした人も植民地の面積の十％位は有ったと見ても余り間違いではないので、そうした計算をすると、合計で百二十万アルケールとなる。

それはキロメートル平方にすると、実に約三万平方Ｋｍとなる。

日本の面積は三十七方七千八百平方Ｋｍとの事なので、その約八％となる。

私の計算が甘すぎるとして、少し下げてみても全く大変な面積を、移民は開拓していたのである。

戦前戦後を通じても、僅か二十万人余りの移民で、それも全部が農村にとどまったわけでもないのに、どうして此の膨大な面積を開墾することが出来たのであろうか。

又、どうして、それ程開墾しなければならなかったのであろうかと考える人もあろう。

それには、事情が判らない為に、数年も住めないやせ地の植民地も沢山あった。又、アリの多い地方で、アリ退治に精根尽きて、祈角開拓した土地に長居出来なかった地方も案外多かった様である。

そうした事情で何回となく移転して歩いた移民も多いのが実情である。

中にはというより初期には、低地帯を拓いて、マラリヤになやまされて、拾てられた植民地も幾つかは有った。

そうした不運を乗り越え、乗り越えて、僅か二十万人足らずの移民が、本国の八%にも届くかと思われる程の広大な面積のジャングルを、道具の無いまま、大なた（ホイセ）と、まさかり（マッシャード）と言う腕の力だけで切り拓いて来たのであるから、今日の若い人達に、時には此の初期の移民のジャングル開拓時代の姿を思い出して頂きたいものと思う。

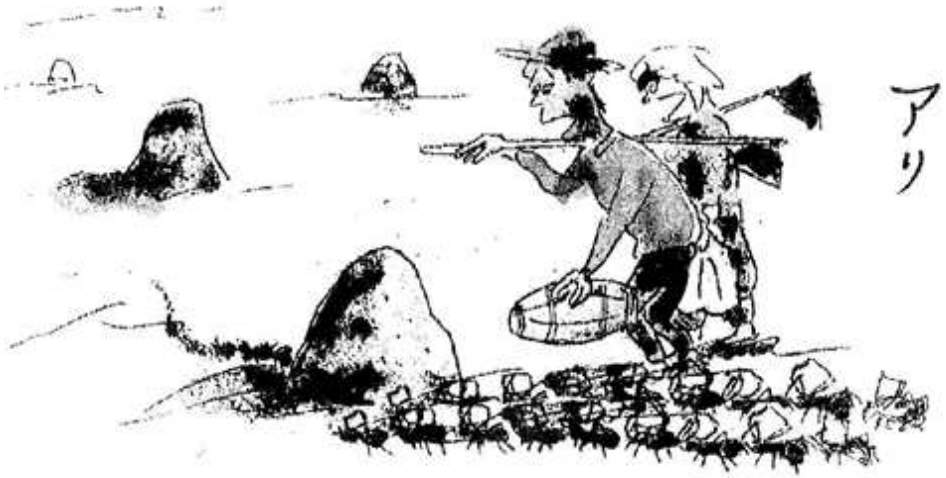
日本の国の八%とは、九州より少し小さく四国よりはずっと広い面積である。

それを僅か二十万人、平均五人家族とすれば、四万家族

位、小さな一つの市位の人口で昼尚暗いジャングルを開拓していたのであるから驚きである。大木の少ない処では土地がやせていて農耕に向かない。

特に当時は無肥料で作る時代であり、大密林でなければ良い作は出来なかったのであるから移民の苦労は大変であったのであるが、張り切っていた移民は、それを乗り越えて来たのである。

第三話　ジャングルと移民　三



前編で土地がヤセ地であった為に、折角開拓しても、長く落ち着けなかった植民地が沢山有ったと書いたが、オウリーニュス方面から、北パラナに入った。いわゆるテーラ・ロッシャという肥沃な地方に育った人には、バウルー、マリリヤ、アラサツーバ、バストス地方などのヤセ地の事は、とても想像出来るものではないと思う。

私はその点、妻がバストス出身なので、早くバストスの一部を知る機会が有ったが、話を聞いて驚いたものである。ミーリョ（トウモロコシ）やアルゴドン（綿）を植えるのに、開拓した年は、畝巾を広く植え、次年度は、出来が落ちるので、二割程度狭く植える。年毎に狭く植えなければ決して前年度に近い収穫は生産されないと言う事であった。

それでは、三、四年すると相当に施肥が必要になってくる筈であるが、当時の農業は施肥をしていては成り立たない時代で、それよりは新らしい植民地へ移動するのが早道となって、次から次へと移動していたのである。

又、蟻の為に移動しなければならなかった事情もある。サンパウロ州の殆んど全般にサウバという種類の蟻が繁殖していた様であるが、此の蟻にすれば、開闢以来の食料供給源のジャングルが、日本移民の植民地建設の為といって、切りまくられ、焼き払われたのであるから、さあ大変、広島、長崎に原始爆弾が投下されたより、まだ大変であったかも知れない。

良く統制の取れているとの蟻たちでは、連日連夜議会を開

いたかも知れないが、とても解決のつく様なものではなかった事であろう。
所が焼け跡に雨が降ると、間も無く、方々で、カタン、カタン、カタン、カタンと妙な音を立てていたが、一週間もすると、柔かい、うまそうな双葉の綿の木の芽が生えて来た。
開闢以来の災難で心配していたアリ共は、ソレーと号令一下、全員出動で綿の双葉を収穫にかかって来たのである。
そんな事を知らない移民は、良い雨でキレイに生えてくれた棉畠に希望をふくらませて出て見ると、『どうした事か』処々に相当な面積の綿の双葉が切られていて、その切られた葉がないのである。
気を付けて見て廻ると切られた畠の端の方で、アリ共は、涼しい間に運んでしまえと一生懸命に一枚の葉を幾つかにきざんで運んでいるのであった。
それから大変なアリ殺しに、又切られた所への植え足しと思はぬ仕事に苦労させられるのであった。

殺蟻剤は殆どが青酸カリが主体との事であったが、当時は自由に買う事は出来た。仕事が増えたのと、この仕事は四、五才の児童まで間にあったので、今思えば、かわいそうな話であるが、当時の子供は、親の苦労を知っていたのか、小さな子供迄が、良く手伝ったものである。
それでは幼児が何を手伝ったかという事であるが、青酸加里を煙りにして蟻の巣の中に送り込むのは少し上の子や娘さんが行ない、幼児はその煙が穴を伝って、他の出口から出る

のを見つける役で、「あっ、こつちから出ている、あっちから出た。」と、煙の出るのを見つけては、飛んで行って足のカカトで穴をふさぐのであった。

此の仕事には幼児が結構一人前に間に合つたと言う事である。

然し幼児迄働かせても日本人が揃って入植している間は良かったのであるが、アリ殺しの為に手間の取れない家族の場合、やむなく畠を売って移転しなければならない事になるのであるが、こうした時、たまたま伯人にその土地が売られると、伯人は殆んど牧草を植えて牛を飼うのである。そして、その場合アリ殺しはしないのであった。その為に、その両隣りは牧場から出て来るアリの為に経営が成り立たなくなり、忽ちの間に植民地が崩壊したという話は良く聞いたものである。

やせ地の為と、この蟻の為に放棄された植民地は、サンパウロ州内に相当な数を示している様である。又、余談と言うには、少し気の毒な話であるが、精根尽きて、殺蟻剤（青酸カリ)を一サジ飲んで亡くなられた話も一度や二度ではないのである。危険なものを使っていたものである。

アラサツーバ管内には私の今までの調査で三十八の植民地が見つかっているものが、三年前の移民九十年に発行された、『アラサツーバ文協七十年の歩み』という本では、現存の植民地として、アーグア・リンパと、カフエゾポリスの二植民地と、消滅した植民地として、十五植民地をあげている

だけである。
現地の人にさえ、二十幾つの植民地の有った事が忘れられているのであった。
又、マリリヤ管内では私の調査で百二十程見つかっているのに、一九四〇年の全盛期には四十八の植民地が有ったと、その分布図が画かれており、一九五八年には、かろうじて二十九植民地が残っていると、一人の老人が調査してＸＥＲＯＸしたものを下さったが。
それでは七〇余りの植民地はどの様な運命に遭遇したのであろうか。
私の調査は、県人誌その他公表された書類、或いは本人から直接に、私は〇〇植民地に入植したという確認のあるものを調査しているので誤りは最小限度のものである。
では稿を改めて考えてみる事にしよう。

第四話　ジャングルと移民　四

此処で説明して置きたい事は、地味が悪かったからとか、蟻殺しが大変であったからとて、祈角苦労してジャングルを開拓した畠を、どうして簡単に捨てる様にして、次ぎの植民地へ移転して行ったかという事である。

私は北海道の出身ではあるが、札幌市内で育ち十五才で渡伯して来たので、農家の事は何も解らないのであるが、それでも学校の遠足などで、農村地帯を歩くと、火山灰土で何も出来ないのだと言って、そこへ、六〇センチ位の間隔で除虫菊など植えてある所が有ったことがあるが、元気の無い除虫菊が四方に十センチ程に葉を出していた。

先生の説明では、これでは、生活が大変であるが、それでも辛抱して、作っていると、数年、或るいは拾年もかかるかも知れないが、その内に自然に作物がとれる様になるものだと言う話であった。

そうした日本の農家の人の開拓の苦労から考えると、ブラジルに渡った移民達は、土地が悪いからと言っては、耕す事も肥料を入れる事もせず、木の芽や、草を取って、唯種を蒔いて穫れる間、収穫して、作物の出来が悪くなると投げ出して、次の植民地に移動して行ったとはどうした事情であったのか。

又、蟻が作物を切りに来るので大変、若し隣りが、ブラジル人に売って行くと、ブラジル人は蟻殺しをしないから、そこから出てくる蟻迄殺さなければならないのではたまらんと、ブラジル人の両隣りになった人は、ただちにその土地を安売りして次の植民地に移って行ったという。

ここで普通に考えられる事は、移って行った先も新らしい植民地なら、再びジャングルの開拓をしなければならないだろう。

移民も数年を過せば、良い土地には、大木が有る事を解っ

てくるだろう。そうなればなるほど開拓にも骨が折れるのに、何故に、次から次ぎと、植民地から、植民地へと移動して行ったのであろうか、との疑問が生じて来る。然し実際に次ぎから次ぎへと新開地を求めて移動した移民の多かった事は事実であった。

初めに書いておいた様に農業に経験の無い人々に、開拓へ、開拓へと向わせたジャングルの魅力とは何であったのか。

一つは、無限の様に有った森林で大変安く手に入った事であろう。

二つには、北海道や満州、シベリヤ等の様に雪の中で開拓するのと違って、冬期といっても薄いシャツ一枚で仕事が出来た事である。

三つ目には、ジャングルの開拓は木を倒すのに骨は折れるが、そこには悪い草が無いので古い畠を整地して作るより、後の仕事が楽であった事。

四つ目は、六、七月に伐採、八月末頃に焼けば初めの雨で、サツマいもや、此方の人の常食のマンジョーカいも、とろろいも等の苗か、種いもを植え、西瓜、南瓜、トーモロコシの種を少し植えて置けば、正月頃から不自由なく食べられるので、金は入らずとも、食べるのに不足のなかった魅力は大きかったのである。又、十二月に入ってくると、日本人の年末年始の出費を知っている綿買業者が、青田貸しを始めるので苦しい時には助けられたのである。

やがて三月に入ると米や綿の収穫、五月には乾燥期豆の収穫と、取り入れに追われるのが普通であった。この綿や米の収入が良ければ、六月七月の残りのジャングルの開拓は請負業者にさせる事も出来た。

然しその家族に元気な若い者が二、三人居れば、この農閑期に自分の畠を造る為の開拓は楽しいもので有った。

植民者の中には、自分の開拓の終った後に、近所の開拓を請負って伐採する人も居た。私たちも何回か、小使いかせぎに請負った事がある。此の仕事は普通の仕事の三割増位の日当になったのである。

然し一番大きな植民地の魅力は、そこは、日本の延長で日本人会が有り日本語の学校が有り、日本語で暮らす事の出来たことであろう。

こうして新らしい植民地は希望に燃えて取りかかるのであるが、数年もすると、生産が落ちてくるので再び、人の噂に動かされ、地味の良い植民地が有ると誘われて、次から次ぎと移動したので、僅かの移民で二〇〇〇からの植民地を造る結果になった。

それでは、移民九〇年の歴史の中で、日本移民の捨てた植民地はどうなっているのか、残った植民地の現状はと言う事で説明したい。

第五話　ジャングルと移民　五

私がマリリヤの名を知ったのは、一九三三年九月頃であった。

私達がサントスに士陸したのは三十三年七月二十九日で、翌ロセッテ・バーラス植民地に向い、その夜はジュキヤに泊って、三十一日の昼には目的地のセッテ・バーラス町に到着していた。

翌日から二、三日視察といって、既に一部を開拓して、住宅などの出来ている土地等を見せられたが、数家族北海道から来た我々は、資金も少ないのだから原始林に入って開拓するのが良い、その覚悟できている。と言って、植民地の地図の上に、会社員がいたずらに、画いたという一本の筋を、鉄道の予走線とだまされて、植民地の一番奥の州政府の保存林との堺に入植して、一週間目には、早くも、ジャングルの開拓にかかっていた。

九月の初旬には伐採を終らせ、未だ焼く前に、一、三回、何年か先きに来ていた人を尋ねていた父は、此処の植民地はダメだ、日本から持参した資金は僅かでも、その金の有る内に移転しなければ大変な事になると気付くのであった。

そこで北海道からの同航者と協議の未、二十八キロ歩いてセッテ・バーラス町にて大きな雑貨商を経営していたN氏に白羽の矢を立てて、お伺ひにあがったのであるが、此の時、マリリヤの話が出たのであった。

N氏は着伯二ヶ月もたたぬのに、此処が駄目と気の付いた事に驚きながらも、

『それが正しい見方だから、一作取ったら早速移転しなさい。それには、今人気一番のマリリヤが、日本人が多く生活はしやすいが、地力は弱いから間もなく衰退するので、パラナ州のロンドリーナに行けば、地力があるから将来が安心だ、行って見て来なさい。』

と言う事になって、渡伯三ヶ月の父たちが、土人が歩くだ

けの獣道の様な道を片道百キロの、パラナ・ピアカーバ海岸山脈を徒歩で、「青い鳥」を求めての視察旅行となるのであった。

則ちセッテ・バーラスから、イタペチニンガまでを歩いて出たのであった。

此れは一九三三年マリリヤの全盛時代の実話である。

地力の弱さを、見る人は見ていたのである。

此の時を堺に、百二十余の植民地を開拓しながら、現存するもの三十にも満たない現状は誠に淋しい限りである。

サンパウロ州の大半がこの様に地力の弱い土地であったので、先輩移民は次から次と移転して開拓したので、その面積が先きに述べた様な百二十万アルケール、約一二万平方Kmとなって、目本全面積の八％近くと計算されるのである。

此の移民の開拓した面積は大変な事を物語っているのであるが、それは少し先きで説明する事にして、移民が「青い鳥」を求めて移動して歩いた姿を別の面から知って貰いたいと思う。

私がそう思うのは、白分達は、始めの一度は植民地に頼れる作物が無い事で移動したのであるが、幸いに移動先きが、良い土地で、今ではその植民地の一部は市街の拡張で町になっているが、半分余りは七拾年を経ながら今だに立派に営農が成り立っているのであるから良い土地は有難い物である。

早くパラナ州に来た私達は、余り動かなければならない事

は無かった。
始めに買った土地を本拠として、資本が出来て、或いは、兄弟の分家、又は子供の成長で、方々に発展して行ったのである。
然るにサンパウロ州の大部分では、砂地で初めから地力の弱い処が多く、中にマサッペ地帯とて、案外に地力の有る処も有った様であるが、砂が混じっていたのか表土の流失が激しくて、パラナ州の北部の様に長期の利用は出来兼ねた様である。
一つの植民地が売り出されると、そこは前人未踏のジャングルであるから、草分けに入植する家族は少なく、大概二、三家族の様であるが、その人達の植えた作物の出来を見て、それが良いと、ドーット、押し寄せる様に入植してくるのであった。
又、初年度の作は、長年の落葉と、山焼きの灰があるからか、作は良く出来た様である。
そこで計画される事は日本語教育の為の掘立て小屋の学校立て、その為の日本人会の創立である。
掘立小屋の学校と先生の住宅は、植民者が日曜毎に四、五回出仕すれば出来上がり。
どこからか、先生を捜してきて、開校すると、引き続いて計画されるのが、若い者の娯楽と交際の為にと、野球場の造成であった。
此のグランドは又、植民者の年に一度の慰安運動会に欠かせないものでもあった。

こうして、移民は自分自身が雨のもる粗末な掘立て小屋の生活の中から、努力していた事を思い出しながら、その努力が、十年前後にして、むなしくも水泡と消えて行った事実を、此の度の植民地の調査で、余りにも判然と知らされて涙を流している次第である。

第六話　ジャングルと移民　六

三章目で、移民の原始林開拓が、三万平方キロに達しているかも知れない、それは母国日本の総面積の八％に当ると書いて置いたのであるが、その件について、もう少し検討して見たいと思う。

一つは、此の原始林の開拓された面積を総数二十万余人といはれる移民の数で割ってみると、百二十万アルケールは、一人に六アルケールとなる。（十四町五反余）　此方に来て生れて成長して開拓に向った人と、移住して新開地の開拓に向わなかった人を、やや同数と見て相殺すれば、日本移民は平均して一人六アルケール程の原始林の開拓をしている事になる。

植民地の二〇〇〇開かれている事は確実、植民地外に、その二〇％以上開かれている事も、全く無理の無い事実である。

然し移民全員、赤ん坊迄平均して、六アルケール程の原始林を開拓しているとは考えられない。

ではどこに間違いがあるのか、有るとすれば一植民地の平均面積を五〇戸、そして一戸分を十アルケール平均とした五百アルケールが、実際より大き過ぎたと考えるより、考え様がない。

そこで、一植民地を半分の平均二十五家族として計算し、それに付随した物も半分にすると、百二十万アルケールが、六十万になり、１一万五千平方キロとなる。

然し無理にそう少なく見積っても、全移民に割り当てると、一人当り三アルケール（約八町歩弱）　となる。

赤ん坊から、老人、婦人の全員の頭割にして、一人三アルケールの面積を、移民は開墾していたとは、考えられない、と言って見ても、二〇〇〇の日本人の開拓した植民地が有る以上、必らずそれ以上の面積は日本人の手に依って、開拓されているのであるから驚きである。

日本人の開拓した植民地の数は、今日、二〇〇一年十月三十日現在で、多少間違いは有るとしても二、〇〇〇を少し上回って来たのである。

今日も尚、近くのウライに九植民地見つけている所へ、ウライ郡には十五の植民地が造成されたと一九四〇年発行の本の記事を見て、これも早く確かめたいと考えている。この様に調査洩れが、次々と出て来るので、今では二、二〇〇には必ず届くという自信らしい物が出来ているので、移民一人当りの開拓面積が三アルケール（約八町歩）の計算は間違いでは無く、実際はそれ以上である。

従って、考えて見なければならない事は、如何にブラジルの原始林の開拓が、雪の降らない、暖かい国で楽であったからとは言え、又、笹の根の様な、一鍬一鍬力一杯で堀りおこさなければならない様な面倒な物が無かったからとはいえ、それ相当な大木は有り、開墾とは楽な仕事ではないのである。

それを移民の多くは、農業の経験の無いにも関わらず、日本人の植民地と言う事で、ジャングルに飛び込んで行ったのである。

私の家はお菓子屋で、私達兄弟は、小学生であった。
隣の主人は三十四・五才の方であったが、北海道で小さな鉄道駅の助役を退職して来られたとの事であった。
向い側の主人は、町から町を渡り歩いていた大道芸人であったという。
そのお隣りの人は北海道からのカゴ編みの職人であった。この人のおかげで、私もかごが作れる様になった。
その向うの人は日本で巡査をされていたとの事であった。
こうした人達で混成されていた我が植民地も、結構米もとり、綿も作り、主作のカフェーザール（コーヒー園）等それ相当なものを造成していたのである。
その土地の総ては話の通り昼尚暗き人蹟未踏のジャングルであった。
猿の大群を始め、タヌキやイノシシに似た動物もいた。イノシシよりおとなしい山豚もいたが、恐ろしい猛毒の蛇も沢山いた。その蛇にかまれて命を落した人もいた。そのジャングルを、日本の開けた都会暮しの家族を半分も混成して来て居た移民が、全員平均して、一人三アルケール（約七町歩余）以上を開拓していた事実に驚かざるを得ない。
その苦労をした多くの植民地は大半消えてしまったけれども、そこに費やされたエネルギーが、今日、各界に活躍する、二世、三世を育てている事を考えれば、決して無駄ではなかったのである。
ともあれ、我々日本移民が一人平均三アルケール（七町歩余）以上の開拓をしていたとは知らなかった……。開拓

初期は殆どの人が、家族の労力で開拓したのであるが、次第に所有地を拡張した者は請負業者に伐採させて、その開拓の面積は増大して行ったのである。少なく見積もった一人平均三アルケール位というのが、その倍を越えているかも知れないと私は考えているのである。

第七話　ジャングルと移民　七

開拓の畑打つ背に眠りゆく
吾子の温みに支えられていき

八巻たけ子

二〇〇〇以上の日本人の植民地が開拓されながら、その大半が消えて行って、後に尋ねて行っても荒れていて、昔、暮していた場所が解らなかった、という話も時々聞くが、正しい故郷でなくとも、渡伯当時暮らしていた所は懐かしいものである。

私たちが着伯直後入ったのは、セッテ・バーラス植民地であるが、此処は殆んど人が居なくなって、牧場も少なく淋しい所になっている。

それでも私は幸いと喜べるのは、私たちが拓いて来た土地には、バナナを栽培していてくれ、最後に行った時にはあの山奥に電気が入っていて、契約者との事であったがパラボニコのアンテーナを据えてテレビを見ている人がいた事である。

植民地の多かった、ノロエステ線、パウリスタ線、それにソロカバナ線の多くは殆んどが外人？　に買われて美しい牧場に変っている。

縁の美しい、広い牧場となっているのであるが、人家が殆んど見当らないのであるから淋しいものだ。

そうした牧場の中の川べりから百米程上った辺りに、点々と竹の株のある処は、先ずその昔、日本人の植民地であったと考えても、殆んど間違いではない。ブラジル人に竹の子を食べる習慣はなかった上、竹でカゴを編むにも、此方の人は、タクワラという自然の竹で、節の所をたたいてつぶせば、身の部分をはがなくとも、そのまま使える物を利用するのみで、日本人の考える様な竹細工をするカゴ屋職人はいな

かった。
従って竹を植える人などは、まずいなかった。
然し此方の竹は、日本の人の殆んどが知らない、株になる竹で、日本の竹の様に地下茎で広がって行かないので私達も住む処にはいそいで植えたものである。竹の子を食べ、竹も何とか利用されたものである。此方の人が孟宗竹と一般にいう直径が一五センチも有る太い竹は、殆んどが竹の子取りであった。此の竹も地下茎は無いので、安心して植えられた物である。
先輩移民は此の竹の苗をどこから見つけて来たのか、大変に良い竹であった。植えてくれた人は、どこで、どうしているか解らないが、残された竹の株は、毎年主人を待って、竹の子を育てている様にも思える。
私はサンパウロ州内を旅行する度に、この竹の株を見ては、つわもの（兵）共のその後は、幸せであったろうか、第二の此の故郷の訪問が、出来たであろうか。
来て見れば、広々とした牧場の中に、思い出の物は何も無いけれど、自分が植えた竹の株が、色々な事を思い出させてくれるであろうと思い、他人事ながら涙を誘われる思いになるのである。全く、日本人の捨てた植民地の跡が、牧場になっていれば、後の人も竹だけは、堀りおこすのが大変なのと、竹の株は増えていかない上に、竹の子は牛馬も食べるので残してくれているので、この竹の株で自分たちの開拓した処と知る事が出来るであろう。
又、植民地は土地が悪かった為につぶれるとばかり言えな

いものである。
　バストスの様に土地は悪くとも、養鶏、養蚕、果樹等色々研究して植民地を守っている所もあるかと思えば、土地の良い事で自慢していた北パラナの、テーラ・ロッシャ地帯、即ち最高肥沃地帯の植民地が、労働問題と、時折りの霜害のためにカフェー生産者が、機械化に依る雑穀、即ち大豆と小麦の二毛作とか、大豆とトウモロコシの二毛作が大型化してきたが、諸々の事情でそれが出来ない者は、土地を売り払って、明け渡さざるを得なくなって来た為に、数十家族、或いは百家族を越す地主を抱えて、我が世の春を謳歌していた立派な植民地も、先ず女子青年会がつぶれ、日本語の学校閉鎖となり、青年会も淋しくなって来て、かって楽しかった運動会も隣りの植民地と合同でという事も長くは続かず、一、三の成功者を残して、植民地は殆んど崩壊し、町の文化協会に加盟している状態である。
　然しまたその町の日系文化体育協会も、開拓当時の植民地の様に在住者全員を把握する事が出来ず、その為に維持費に苦労している処が多いのが現状である。
　私が今、若い人にお願いしたい事は、我々の先輩は僅か二十万人余の人数で、二千からの植民地を開いて、その苦しい中で二千の学校を建てて、子供の教育をしてきていたことだ。そのエネルギーは、一人平均にして三アルケール（約七町歩）以上のジャングルを開拓していた事で理解させられる。
　その事が理解出来れば現状の文協の経常、日本語学校の維

持費等、何事もなく解決されるものと考える。
初期の移民が何程の資金も持たず、幼い子供を連れて、ジャングル開拓に入って行った時の気持を思いおこして見るならば、解決のしない問題はなかろうと思う。

この項を書き終えて、ペンを置き、イスの背に肩を持たせて、一休みしようとしたら、カーン・カーンと大木にマッシャード（マサカリ）を打ち込む音が聞える様な錯覚におそわれた。
六十八年前、札幌市内から、セッテ・バーラス植民地のジャングルの中へ直入して一週間後には開拓にかかっていた時の事を脳の一部では覚えていたのであろう。
カーンと打ち込めば、カーンと彼方の林の中から、コダマして返ってきた、「あの音」が、聞えるのであった。

第八話　ジャングルと移民　八（統計）

私は、ブラジルに渡った日本人の移民が、どの位の農地を所有しているのか調べがつかないものかといつも思いながら、及ばぬ鯉の瀧昇りと、あきらめていた。

ところが今回の、日本移民の開いた植民地の数から、私たち移民が、開拓したジャングルの　面積の、或る程度の確実性を持った数字を知る事の出来た事を一つの収穫と喜んでい

る。

その日本移民の開拓した面積が大変広大な面積になるのに、その移民の中には、農業に経験の無い家族が沢山いたのである。然しその数は農家の方が多かったであろうと、少し遠慮して書いて置いたのであるが、移民五〇年祭の記念事業に出された、鈴木悌一氏の書かれた実態調査に依ると、ブラジル移民は農業者は三一％とあり、非農業者の方が六九％と、実に倍以上も来ていたと書かれている。（此の項の終りに表を載せて置きます）

全員が書類の上では農業者として渡航して来ているのに、どうして調べがついたのか不思議であるが、学者の偉さである。私もその統計を支持したい。

そこでそれを支持してみると、私が初めに書いて置いた、お菓子屋の主人も、学校の先生も、巡査の家族も、質やの且那も、ソバ屋の主人も、呉服屋さんも、ブラジルに来た移民は、植民　地の開拓に挑戦した事の実感が湧いてくる。

そして又、そうした人達が多かったから、農家として、ジャングルを拓いて、地主として落ち着くという考えより、事業として考える人が多く、儲かるからと、労働者を入れて拡張して行く事になった為に、多くの植民地が開拓されたと言ふ理論が成り立つようにも忠われる。

先日、サンタ・カタリーナ州の旅行で、昔欧州のオーストリヤから二隻の船で来た移民に依って開かれたという町に二、三泊した事があるが、けわしい山脈の中で、畠も良くなければ、町も発展しない、元、来た人達だけの子孫が暮らし

ているらしいので、どうして、この険しい地帯に落ち着かれたものかと思って尋ねると、自分達の育った所より良かったので喜んで落ち着いたという事であった。

考え様では、現在の様な、ブラジルの国情で、盗人が多くて生活に安心の出来ない時、泥棒の心配は有りません、と言う此の地方の人達には、一寸うらやましい気持ちもした。

然し我々、文化の開けた日本の都会から来た者には、食べて行けるからとて安心して居られはしなかった。

或る程度の生活、子供の教育、帰国、訪日等々にお金は必要であった。その為にジャングルの開拓は、小資本の者にはもっとも近道の事業であった上に、小々言葉が適じなくとも、労働者への支払いを正直にして行けば拡張して行ける仕事であったから、次から次と拡張していく人がいたのである。

移民が膨大な面積を開拓したという原因には、この様な、農民でない、開拓の仕事にも畠の仕事にも何の経験のない人々を多く送り込んでいた為に出来た事であるから全く不思議である。

理論からいけば農民でない家族を七割近くも送ったブラジルへの移民は、大失敗であった。南米のジャングルを前にして、唖然として、進んで手をつけ様とする者はいなかった。と言う事になっても不思議ではないのに、移民の一部の植民と言はれた人達は、日本でジャングルの購入契約をして来た為に、現地に到着すると、ただちに、ジャングルの開拓に立ち向ったのである。

又、コーヒー園への契約移民も、時には一年、或いは二年との労働契約の差はあっても、それが終れば、殆んどの人は土地を買うか、地主の契約農として、植民地の開拓事業に立ち向ったのであった。

それが、巡査上りであれ、教頭先生であれ、駅長さんであれ、私たちの様なふらふらのお菓子やの職人と学生という様な者であれ、みんな元気を出してジャングル倒しに取りかかったのであるから不思議である。

それも日本から持参の道具は何にも間に合わず、鋸でさえも、目立て職人がいない処であるから日本鋸は殆んど使えないので、マッシヤード（斧）一式であの広大な面積が切り払らわれたのであるから、不思議、不思議と書いてきていたものが、鈴木悌一先生の調査に依る統計で、日本移民は、日本人植民地を日本人の村作りと考えて取り組んだ人より、金儲けの事業として、取り組んだ人の方が、はるかに多かった事がわかる。従っていわゆる農家から篤農家として納まる者も出たが、企業的に発展して行く者が多かったのである。

それで、二十万人余りの日本移民の四十年程前までのマッシャド（斧）の時代迄の事業に於いて実に日本の面積の五％以上、十％近く、或いはそれ以上の広大な面積のジャングル開拓という大事業をなし遂げているのである。

今では多くの植民地は荒廃してしまったが、残った地主の事業は大型化して、過去の一植民地の面積位は、一戸の仕事場にも満たない様な現状であるから、移民が開拓した二千に及ぶ植民地の大半は荒廃し、目本人の農家は激滅していると

いえども、その規模が機械化され大型化されたので、その面積に於いては何倍かになっているので、その総面積はどこかに書いておいた様な、九州に及ばず、四国よりは広いなどと言うものではなく、現在ではその二つを加えた程の、広い面積が、移民の二世、三世に依って耕作されているのである。

又、日本人の開拓した跡が外国人に買収されて牧場に変っていると書いておいたが、日本人の開拓した植民地の平均の広さより遥かに遥かに広い牧場を一人で経営する畜産家も、どしどしと出現して来ているのであるが、移民も百年になると、そんな事はニュースにならないので知らないでいるだけの事である。私の友達が、二人の息子さんの為にと買った土地が、六千アルケール。ロンドリーナの某氏がこの頃売った牧場が一万三千アルケールであったというが、この様な事はこの頃ではニュースにならないのである。

日本から送られた二十三万人に滴たない移民の活躍に世界が刮目する時代が、目前に来ている事を思えば、将来は楽しみであるが、私には今日も既に楽しいのである。

日系社会も成長したもので、此の頃では、移民の成功者調べ等、しなくなったので明らかでないが、カフエー、棉、馬鈴薯、大豆等の大生産者の中に堂々と入り混んでいるのである。

人口比率では僅か一％程の日本人であるから頼もしい限りである。

リオグランデ・ド・スール州に北海道人が持ち込んだとい

われる大豆が、同州に広がり、それが次第に北上して、パラナ州、サン・パウロ州、南・北マット・グロッソ州ミーナス州、バイヤ州へと広がり、その生産量も、北米に次ぐ事になって、此の辺で落ち着くかと思いきや、此の頃はアマゾン河を超えて北半球に入り、ベネズエーラの国境に迫っているが、その先鋒に立っているのが日系人である事は聞いてもうれしい話である。

やがて北米を凌ぐ生産量をあげる事になるのかも知れないのである。

移民の日本に於ける職業

	農業	その他	合計
農業	5.160		
販売		5.220	
技術工		2.857	
サービス		1.472	
専門的			
技術的		812	
管理職		444	
事務		393	
運輸、通信		269	
単純労働		85	
漁業		31	
採鉱、採石		2	
	5.160	11.585	＝16.745
	30.8%	69.2%	100%

上の表は1964年発行のブラジル日系人実態調査の資料編146ページの一部を参考にして作製したものである。

第九話

ジャングルと移民（後書き）

本書の校正も殆んど終って、一安心して、ふと本棚の故牛窪氏の二十五年程前に発行した、一冊の本を開いて見て驚ろき、急いでこの一文を書いておく事になった。

私は日本人が開拓した面積は農家の数は減少していても、残った人は殆んど大型化しているので維持していることには間違いないものと考えペンを進めて来ていたのであるが、此の牛窪氏の書かれた本を開いてみると、何んとパラナ州に住んでいる人で十万アルケール以上持って開拓している人が二人書かれて居る。それも私のすぐ近所に住んでいる人なので驚いたのである。

今その事を、日本移民の分布から考えてみると、パラナ州内にもまだいるであろうし、ブラジル全般に広げて見るとその五倍の十人位、いても何の不思議ではない。

してみると、此のトップの十二、三人で、私が調べ上げた、二〇〇〇植民地並びに、その周辺で働いた面積が百二十万アルケール位であったろうし、その位の面積を現在の日系人が維持しているかと想像していたものを、僅か十人余りの人で所有しているとなれば、私が想像していた事は根底より引繰り返ったと言う事である。

そこで現在の目系人の所有する面積を新らしく概算してみると、最初の百二十万アルケールは、十万アルケール以上の

人でまとまる。
次の百二十万アルケールは、十万アルケール以下、一万アルケール迄の人で出来る事は、無理な考えではなかろうと思う。
そして、その次の百二十万アルケールは、一万アルケール以下、一千アルケール迄の人達でも無理無く出来そうに、私には思われるのである。
そして更にもう一組、野菜等の零細農から、一千アルケール迄の人達で出来る事は、その戸数は多くなるが、一番確実性は高いと思う。
今こうした思いがけない事を考えさせられて、日系人の底力の偉大さに驚かされているのである。
少し前に、日本へ出稼ぎされた人達が一年間に持ち帰った金が、世界一のカフエー輸出国である当国の、そのカフエーの輸出額に匹敵したという事であったが、ブラジルの日本人は、資産も労働力も莫大に持っているのだ。
私が今気がついた日系人の持つ農地の面積が、百二十万アルケールを四段の階層で持っているものとすれば、実に四百八十万アルケールとなり、その可能性も、一人で十万アルケールを持っている人が出て来たので、考えられる事ではあるが、余りに膨大な数字になるので、百二十万アルケールの四段階に考えたものを、三段に下げて見ると、何か強く現実性を感ぜられる。
先ず一段目を、零細農家から、一千アルケール迄の人で、初めの一段階の百二十万アルケールに達するものと見、次は

一千アルケール以上、一万迄の人で二段目とし、三段目を、一万から上の人でと考えて見ると大変現実味が出て来て書いて居ても安心感が持てる様になった。

それで、総計三百六十万アルケールの農地を、日系人が持って居る事になって来たのであるが、その面積は一体どの位の物なのか、具体的に説明して見ると、八万七千平方キロメートル強で、日本の九州の倍程で、北海道より少し広い面積になり、それは、日本の二十三%に当る。

尚、ブラジルの土地は、日本の様に山岳の為に七〇%近く耕作が出来ない処と違って、七〇%は、いやもっと良いパーセンテージで耕作が出来る上に、殆んど二毛作が可能なので、その生産量には大変大きな有利性がある。

従って、北海道程の面積を我々移民が所有している事は誠に大きな財産なのである。

日本の国土の四分一の面積を所有するブラジル移民の畠がフルに生産をする事になると、日本国の全農耕面積に匹敵してくるので大変な事となるのである。

従って考えられる事は、ブラジルに送った二十三万人に満たない移民が、今日、日本国の農耕面積をブラジルに於いて所有していると言う事実である。

此の事実を、日本国大使閣下、多数の総領事閣下の力で、更に詳しく調査の上、此の底力を築き上げた移民に、更なる発展に寄与する様に、精気をあたえて頂きたいと思う。

移民は働き者である。二十三万に足りない移民で、百二十

万アルケール、平均して一人五・二アルケール（一二・六Ｈａ）のジャングルの開拓を遂げているのであり、その移民の七割は、農家でなかった事を忘れてはならないのであります。

人口の膨張を続けている世界が、近い将来、その食料を求めて此のブラジルに殺到して来るのは決っているので、ブラジルの農家は大きな希望を持って頑張っていれば良いのである。

第十話

米相場と移民

先日、初期アマゾン移民のビデオを見ていると、アマゾンの密林に入植した新移民がその密林をマッシャード（マサカリ）やフォイセ（大かま）など見た事もない道具で、只の体力だけでその開拓にかかり、焼き払った跡へ稲を蒔き付けた。

せめてもの張り合いをもたせてくれたのは、植え付けた稲の出来に合せて、会社からフォルネッセ（支給）される白米の値段が、買う度毎に上がってくる事で、自分たちの収穫もその値近くで売れるなら少々の借金になっていても、収穫さへすれば、簡単に払えると胸勘定をしていたことだ、とこ

ろが収穫した米を渡して、会社から受取った勘定書を見ると、吃驚り仰天、予想の三分一にも足りない様な清算書であった。

激昂した移民達が会社に談判に集ると、会社側の言ひ分は、「あなた達が移住してきたので、此の地方で収穫して有った米が不足し、遠方より買い込んで間に合せた物は運賃がかさんで大変高くなった。

さて皆様が収穫した米を市場に出してみると此方には食べる人が居ない、それで日本人の多い地方迄出荷するとなると運賃に喰われて手取りが無くなる始末」という。

ブラジルを知らない移民達には何んとも納得のいかない説明であり、事実生活がかかっているので簡単にそうですかと承知出来兼ねるのであった。

私はこの場面を見ていて、移民の気持ちは充分に理解出来るが、会社側の苦しい立場もすぐ埋解出来たのであった。

それは一九三四年にパラナ州のロンドリーナに移転した年が、恰度同じ様な事態を起したからである。

ロンドリーナに到着した五、六月頃一俵七ミルレースであったアロースのカスカ（モミ）が八月頃から上り出して九月には二十七・八ミルレース迄暴騰したのであった。両親は仕方なく、日本から持って来た新しい来客用の布団や時計等を売って米を買うという様な最悪の事態に追い込まれたのであった。しかしその高値も植え付けの終る頃から下がり始めた。誰かがボツボツと売り出したのか、地方からでも取り寄

せたのであろう。収穫期になると一俵八ミルレースへと逆戻りしたのである。その経験でアマゾンのビデオの理解がすぐ出来たのであった。

日本人のブラジル移住は大正末期から、昭和の初期にかけて大挙して来たのであり、丁度その時期にノロエステ方面から南方にかけて急激に開拓が進んだので、どの地方が良いらしいと噂が出ると、集中して移動する傾向が有ったので、米価に付いては同じ様な声が方々でおこったのであるが今では古い、忘れられた話になってしまった。

当時の日本人の移動は、日本人の少ない時代の上、一儲けして帰国する考えであるから、日本人の居る処で、出来れば、日本語の学校のある処か、集団して入れば学校が開ける と、考えて、日本人の売り出す植民地などに決っていたのであった。

そこで、あそこが良いそうだと評判が立つと、集中して移動して来るので、米相場に変動をおこしたのであった。元々米が無い上に、トラックを持っての運搬業者等も殆んどいなかった時代であったから仕方がないのである。

又トラックが有っても、それだけの米を収穫して持っている農家の無い時代であるからどうしようもないのであった。

それにしても米相場が暴騰暴落して驚いたのは、アマゾンもロンドリーナも一年だけの現象で落ちついたのではないかと思う。

ロンドリーナの場合は四方に向って肥沃地が多く、カ

フェー景気に恵まれて、長い間日本人が移動して来たので、米が売れないという事が無くて助かったのであるが、アマゾンの場合は後続移民がどうであったか、若し米を食べる日本人の入植が止まると折角生産した米を食べる人が少なければ、相場が安くなって、祈角収穫しても金目にならない事になっては大変である。

当時の米は殆んどが日本人だけの需要であるから、自分達の移動に依って相場を動かしていたのである。

第十一話

好運（一）

或る時一つの農地を買った。実はその土地の前を通って親戚の処へ遊びに出かけたところ、土地の入口に『この土地売ります』と、書いた看板が立ててあったので、幾ら位で売っているのか一寸参考迄に聞いて見よう、と立ち寄って見ると、案外に安い。然し亦収入もないので結局買う人もいないのか、と思い、その時はそれですんだのである。

次に又どの位してかそこを通って見ると、まだあの時の看板が掲げてある。ロンドリーナの町に近い此の場所で地味も良いのに如何にも安いと、思えるので弟に相談して買っておく事にした。十アルケール（二十五町歩程）の面積で八〇

万クルゼーロスであった。
それから間もなく、その土地から川一本町寄りに兄弟で持っていた一アルケール半の土地に思いがけない事がおきてきた。
先ずはその土地の下側を流れていた小川の水が、上の町の方で汚染されて悪臭を発する様になって、川遊びが出来なくなってきたのである。それで嫌気がさして三〇万クルゼーロスで売りに出したのであるが、なかなか買手がつかない。
それでもある時日本人の買手が現れた。支弘を半金六ケ月待ってくれればと云う事であった。
それで分割払いは差し支えないが、川の水が汚れてきたので売る事を、承知して買って欲しいと説明したら、それではいらないと言う事になってしまった。
それで致し方がないので、もっと値下げをしないと売れないかと心配していたら、或る日、一人の田舎者らしいブラジル人が尋ねてきて、「あの土地、今でも売るか…。」と、聞くので、売ろうと思っていると答えると、「それでは買手がいる。私はコレトール（不動産業者）ではないが、世話をするので幾らか手数料を頂きたい。買う人は現金で八〇万クルゼーロス払ってくれる。」と、言うのである。
私達は三〇万でもなかなか売れないので困っていたところへ、八〇万払うというのであるから驚いたのである。
それでも川の汚染の事を話しておかなくてはなるまいと考えて、「その人はあの川の汚れを知っているか。」と、聞いて見ると、「その事は心配いらない。隣の人が買ひたいと言っ

ているので。」と、言う事であった。
全く舞い込んで来た福の神である。
早速売買手続きを済ませ、手数料も少しはずんでこの土地の件は整理がついた。

兄弟共同の施設は、先に私と弟で買ってあった土地の中間に二アールケール分譲して立派な会館を建てたのであった。
此の会館の建築が進行中に、この建て物が遊廓になる、と噂を流した者が出た。なんとしても農産物では利益のあげ難い時代であったから、此の投資では遊廓でも造る位に思った人がいたのかも知れないが、私達には三〇万と思っていた土地が八〇万にも売れて、資金は有っての建築であった。
此の会館は親戚や一般の人に開放して、一寸したピクニックや結婚式に、無料貸出しして使ってもらう為のもので、小さなグランドも作ってあり、子供達の為の遊び道具も据えてあるが、そうした場処が沢山有るためか、県人会その他でピクニック等を催す事が少ないからか、案外に使う人は少ないものである。
私たちは此の会館を儲からない事に開放しているが、建築中に噂が出た、遊廓にして儲ける話しであるが、四・五十年昔に知人が遊廓に飲み屋を開店して儲かるものだと話しをしていた事がある。何んでも普通の場処の五倍から十倍に売るので、客を連れてくる女に十％私っても儲かるものだと言うのであるが、近所で百姓の時はまじめな青年であったが、その商売に替って十数年で全く哀れな姿になって亡くなって

行った人がいるが、あの姿を見ると、人生とは金で幸福を掴めるものではないと思う。金は必要だが無埋な金儲けではだめな様だ。

諺に言う悪銭身に付かずという事は正しいようだ。

第十二話

好運（二）

前の話で兄弟の共有地を三〇万クルゼーロスで売りたいと思うものの、容易に売れずに困っていたものが、八〇万で売れていった話を好運と喜んで書いたのであるが、なる程、金額の割合から言へばそれは大きな好運である。

然し私達兄弟の今日あるのには、そんなものではない。もっと大きな幸運に何回も恵まれてきているのである。

先ず最初は、渡伯、二ケ月目か、植民会社の重役に植民地の区画をはずれた処に引いてある線を尋ねると、それは将来の鉄道の予走線で、即ち沼田さんの土地が将来鉄道に一番近い事になる、とだまされて、大喜びして入植して原始林の伐採を二アルケール（アルケール二町五反余）済して、乾燥するのを待っていた時に、遊びに来た旧移民の親切な言葉の一言に、此の植民地はダメだ。日本から持ってきた小遣いの

幾らかでも有る内に良い処に移らなければ、大変な事になると気が付いたことだ。
これが、渡伯して、最初の、そしてもっともおおきな好運であったのである。

その事がまだ好運とは気が付かず、ここはだめとは解ったが、どこに良い処が有るのか検討中の或る日、父と私の二人で、七・八K　m離れた処に立派な住宅を建てている人が居られるとの話を聞いて出かけた事がある。私は尋る理由も知らず、立派な家をたてている大地主という事で、見物がてら遊びに行く位に思っていたが、父にすれば、一般の人より広く土地を持って、今また大変立派な住宅を建築中との事で、将来に付いて何か一般人と違った方針が立っている家かも知れないので、そうであれば参考にしたい、という考えからであったろうと思われるのである。住宅の前に相当な自然の池があり、話ではワニが何匹かいるとの事であった。
二十才から三十才にかけての若い男の人が三・四人いる様子であった。
主人と色々話をしていたが、将来を託する産物の見込みは持っておらず、只アマゾン地方からか、ジュツターという繊維を取る作物の苗を手に入れてブレジョン　（湿地帯）　に試作しているとの事であり、換金作物としては稲を栽培するとの事であった。
又、若い者のたのしみに休日には競馬の出来るようにと小さな競馬場も作ってあるとの事であった。

一寸驚いたのは、住宅の建築である。相当大きな家が二階造りである。下の部分の壁板が張ってないのに、二階の柱を立てて梁などを組んでおられた。一寸したお城の様に思えたのは、自分達が小さな丸太小屋に住んでいたからであろう。

帰り道の父の話であるが、ブラジル迄来て水の中で仕事をする、水田やジュツター栽培は気をつけなければならない。水の中の仕事ははかどらないし、大きな仕事が出来ないので希望が持てない。だからといって、此所の植民地はやっと三年で皆さん見込みの立っていないのに、張り切って居られるから、どこに良い処があるかと相談に行っても、こちらは新移民なので、ここで良いのですよ、と言われるに決っているようなものだから困ったものだと、父は心配していたのであった。

一緒に来た大西、加藤氏は三十才余りの若い人であったから、五十になっていた父は責任を感じていたようである。

三人は週の内に二度三度と集まっては、日本で貰った宣伝の物や買ったブラジル案内書などを中心に、協議するのであるが結論が出ない。誰に尋ねるかという処でまごついてしまうのであった。

此の協議は夜の事であり、距離の都合で、三軒の中間の大西家に集る事が多かった。

恰度、尋ねる人が決る時、私も脇で聞いていた。私の父が「それでは私の考えを言おう。それはセッテ・バーラス町で商売をしている西岡儀作氏が良いと思う。大きな商人であ

り、私たちがあの町に到着して此方へ来る時買物に行った折り、色々と伺ったが、仲々の人格者の様であった。その上あの様な大きな商売をしているのでブラジルの情報にも詳しいとおもう。」

と、言うと、他の二人も納得して早速二十八Ｋｍ歩いて出かけることになったのである。バスも馬車もないので歩くより仕方がないのである。

二十八Ｋｍ歩いて西岡氏を尋ねた時の、父の話は次の様であった。

『先づ渡伯二ケ月余りで此処がダメと気のついた事に驚かれ、事実その通りだ、此処の植民地の人たちほまだ気がついていないが、此処はダメだ。私は近くロンドリーナに移転するつもりだ、長い将来を考えるならロンドリーナが良い。差し当っての事を考えるならマリリヤの人気も良し日本人も多いから苦労は少なかろう。但し土地が弱いから将来性は低い。』という事であった。

そこで、百Ｋｍ余のパラナピアカーバ山脈のジャングルを歩いて突破する視察旅行となるのであるが、その事は既に発表済みである。

我が家の最高の好運は此の時の父のひらめきであったのである。

私たちがパラナ州のロンドリーナに移る事に決ると、同船者の七家族は時を同じくして全部移る事になり、その他の人々も、忽ちの内に移動することとなって、数百家族の入植者が居た筈のセッテ・バーラス植民地はたちまちに崩壊して

行くのであった。
　コロニヤの有名人、山本勝造氏も此処の植民地会社に働らいていて、あの気性からもきつい引止め役で頑張って居られたが、北パラナのコーヒー栽培、ソロカバナ沿線の綿作者の様子が解って来た植民者を引止める事は出来なかったのである。

第十三話
新らしい昔話

この話は移民渡伯八十周年の時の事であるから、昔からいう拾年一昔という言ひ伝えからすれば、やっとでも昔話にはいるものではあるが、昔話というには案外新らしい話であるのに大変に忘れられているので書いて見る次第。
　当時お世話をした役員の方々からも殆んど忘れられている話に、俳優の杉良太郎の来演がある。とにかくロンドリーナ迄来られて、尚一万ドル置いてゆかれたのであるが、みんなで愉快に乾杯して、パアーと喜べない事に終ってしまったのは情けなかった。
　杉氏自身にも満足してもらえなかった。と、言ふより全く彼には予想外の不快を与えてしまった事は申し訳の無い事であった。その事情は簡単にいうと次の様な事であった。
　杉良太郎が来てくれて、更に一万ドル下さるのだが、どの

位の聴衆を集められるか、という話を上野連議が持ってきた。移民八十年祭の祭典委員会では、相当な資金を集めなければならない時であるから、耳よりな話であった。

誰れ言うとなく千人近い観客は集められるだろう、と言う事になった。その理由は、パルケ・ネイ・ブラーが会場で、大々的なＥＸＰＯＳＩＣＡＯ博覧会が開かれているので、相当な入場者があるから、ショウが始まる時間になれば、その人達が流れてゆくので千人近い人は集まる、と言う計算になったのであった。

そこで上野連議も一安心して強い交渉が出来て実現する運びとなったのである。そこ迄は順調で良かったのであるが、経験ない者の安請負は大変な事になった。

四十メートル巾に奥行十数メートルの舞台作り、飾り、照明等の準備等々で一万ドルは消えそうであった。更に千人分の腰かけをどうするかという事になり、何人かの役員は全くテンテコ舞いの忙がしさに追いまくられていた。

ローランジャ会場では文の宮親皇並びに、大統領御夫妻をお迎えする二・三万人の歓衆の集る会場造りがあり、エスポジソン会場ではパラナ州では見た事もない飾り付けをする為に、何百人の人々が奉仕されていて尚仕事に追いまくられていた。

その当時サルネイ大統領の人気が悪く、行く処、行く処で、卵やトマテの腐った物を投げつけられたりしていたので、いつ、何処でテロに襲はれるかも知れない、と考えられてか、何かに不満をコジ付けて出席取消しを言ってくるので

困らせられた。いよいよ祝典も間近に迫った一過間程前になって再び取り消しが来た。

役員が奔走してやっと建てた記念碑の、自分の名前が、或る人の下になっているのが気に入らないと言ふ事であった。仕方がないので石屋を頼んで建ててある石碑の名前の処を一晩の内に磨り落して彫なおしたところ、文句の付け処がなくなったか、当日は出席して下さったが、全く役員には並大抵の事ではなかった。

そうした混雑の中で杉良太郎用の舞台が作られて行くのであったが、六百メートル坪の床板が薄いからとて、張り替えさせられたり、千人用の腰かけ作りに開演間近まで迫いまくられるのであった。そうした仕事に迫いまくられている時に、杉良太郎は女性ファン数十名を日本から引き連れて空港に到着したのである。

そこに現出した光景は全く千載一遇の一大事件であった。当時売り出し中の杉良太郎氏の出迎えが、空港で数百人のファンに取り囲まれても不思議でないものを、唯二、三人の役員の出迎えで、一人のファンも居なかったのであるから申し訳けのない事此の上なし。日本からのファンが数十名、殆んど女性であったがついてきているのに、当方には一人も出迎に来ていないのであるから、国情の違いとか忙しさに追いまくられていたとは言っても、言い訳にもならない大失敗をしてしまったのであった。

その為に、実演が租末だったとの批判を受けたが、本人に

してみれば力が入らなかったのも無理はなかったと思う。
然し役員達は仕事もし人集めもして夜の会場には千名は集めたのであった。
腰かけも試験場の植林を切り倒して、腰かけの高さに切って並べ、板を置く予定のところ、ロンドリーナのＡＣＥＬ文化協会の役員の荻堂ルイス君が方々から折りたたみ式の物を集めて来てくれて大助かりしたのであった。
杉良太郎ロンドリーナ公演、僅か十年前の話であるが、それが全く忘れさられていて、人の話しに出て来ないのであるから、良くも忘れられたものと一人で驚いているのである。
大失敗したとはいえあれだけ苦労した大仕事であったにもかかわらずである。

第十四話

体　力

ブラジルに移住して、ジャングルの開拓から始める農家になり、一儲けして帰国するつもりで、日本でセッテ・バーラスの土地を十アルケール購入して渡伯して来たのである。その後も農業一本で私達の今日があるのではあるが、当時の家族構成を振り返ってみると、外国に出てジャングルを開拓し、農業で一儲けをしようとの考えは、大変に無理な考えであったと思うのである。

それは、一人一人の体力が余りにも劣っていたからである。

家長の父にしても五〇Ｋｇそこそこの体重に、身長一メートル五五位の、どちらかといえば中型以下であった。

兄は一八才で一メートル六十五はあった上に元気であったが、学生上りで体力はない。次の私は十五才で医者に見放されている状態で、寝ているような事はなかったが力がない。次の弟は十才で渡伯当時は弁当運びをしてくれた位である。

かような家族構成で農業で一儲けとは、大変無理な考えだったと思うのであるが、それは別として、ここで、力の無かった事を、当時を振り返って少し書いて置きたいと思う。

渡伯してセッテ・バーラスでは農家出身の大西氏と隣合わせの土地に入植した。

お互いに初年度の開拓は、請負わせた分と共に二アルケール（やや五ヘクタール）であった。

大西家の働き手は長女が十一二才で、やっと炊事の手伝いが少しできるかという事で、畠仕事は三十前後の夫婦だけであった。

そこで、その年の収穫であるが、共に米を植えたその収量が、如実に町育ちと農村育ちの差を出したのであった。

私の家では五〇Ｋｇ入れの俵で八十八俵、大西家では百二十俵収穫したと言う事であった。

きれいに成長していたし、良い穂を出していたのであるが、収量は少なかった。

尚、畠の所々で収穫した米を家へ運ぶのに、十六才になっ

ていた私が一俵を二回に運び、十九才の兄は、父に手伝ってもらって一俵をやっと肩に上げて運んだ。そこへ行くと父は二十八才迄百姓をしていたからか、俵はこうしてかつぐものだと言いながら、さっとかつぎあげたのであった。

ところが隣りの大西さんは農家育ちで、背丈は高くないが骨格が頑丈で力持ち、五十Ｋｇの俵を二俵づつかつぐのであったから、とても立ち打ちできなかった。子供たちもそれぞれ体が丈夫に育っていた。

翌年ロンドリーナに移って、更に一年した時、私たちの組では町へ行き来するのに連絡道をあけたので、私の家では、その脇に家を建てて移ったのであるが、この時に井戸を掘らせると、良い水が出て近所の人が貰いに来たものであるが。此の時おどろいたり、はずかしい思いをしたのであった。私は十七才になっていたが、二十リットルのラッタ（空かん）二つの水を天秤棒でかつぐのに、重くてかつげないでいると、大西様の十二・三の女の子が、さっとかついで、二百メートル程の家まで運んで行くのであった。

その年（一九三六年）　の五月フェジョン　（豆）を二十俵程売って、二トン積みのトラックに来てもらって運ぶ事になったのであるが、二百メートル程走った所で、車のモートルから火が出て、トラックが燃えだしたのである。『さあ大変だ早く荷をおろさないとフェジョンまで燃やしてしまう。早くおろしたいのであるが六〇Ｋｇの俵が重くて、私と運転手とで困っていたら、近くで働いていたＫ氏の娘さんがかけ

つけてくれて、簡単に全部おろしてくれて、一俵も焼かずにすんだのであった。此の時もこの娘さんの力に驚いたのであった。そのような弱い体力の　私たち兄弟であったが、肥えていたテーラ・ロッシヤのおかげで、良い生産と、温暖な気候の　恩恵で、次第に体力を身に付けて、やや一人前の開拓者となって行くのであった。

第十五話
ホーレン草

今では何処へ行っても日本と変らないように、色々な野菜が豊富にあるけれども、ロンドリーナの開拓当時はフルタリーヤ（野菜と果実店）に、ミカンに自然生えの木から収穫したマモン（パパイヤ）等と、土のついたマンジョーカ（いもの一種）やサツマイモに並べて、畠に自然に生えてくるセラーヤ（タンポポの一種？）　の葉や、自然生えのトマテ、親指の一節位のものを誰が持ってくるのか一皿程置いてあるのを見たことがあるが、誠に野菜らしい野菜は少なかったのである。

然し日本人の農家では日本から持参した種とか、その他でも種を入手すれば、土地が肥えていたのでかんたんに立派な野菜は出来たのである。それでも、野菜を食べる習慣の無い

ブラジル人相手には余り売れないので、商売にはならなかったのであろう。

さてロンドリーナ近郊の中央区に入植すると、町迄四Ｋｍ程であったので度々町に出る事になった。セッテ・バーラス植民地の時のように二十八Ｋｍも歩くのとは違って、町に暮らしているような楽しい事になったのであるが、度々町に出て先ず気に付いたのは、お菓子の値段の案外に高い事であったのは、札幌でお菓子商をしていたためであろう。

原料の砂糖や麦粉の値段から計算してみると、卸値にして、日当が、農家の三倍から四倍になるので、父親が言うに、畠に労働者を入れても当分は少しお菓子を作ってみようと、言う事になり、旧式のせんべい型を日本の姉に注文すると、半年もするか、しない内に最も旧式の小形の物が一組送られて来た。

ところがその包みの中に野菜の種が何種類か同封されて来たのである。

それで此の項の題名のホーレン草の話に入れるのであるが、前置きが少し長過ぎた様である。

送られてきた野菜の種の中に、結球白菜と、ホウレンソウの種が有ったので早速畠に植えたのである。

別に野菜畠として水をかけられる場処を作らず、カフェーの中の倒れた大きな木の影の幾らか西陽を防げる様な所で、腐れ木のある様な所を選んで植えたのであったが、雨順が良かったのであろう、太変に立派なものが出来たのであった。

特別大きく太ったのは、カレアドール　（作道）　の脇の木の株の陰にこぼれ落ちて、ひとりで生えた白菜の一株が七キロもあったのである。なんとも立派なのに驚いたのでのであった。

ホーレン草も良くできて、おひたしや、味噌汁の具として楽しんだ。又隣近所の人にも食べて頂いたのであった。土ぎわで切っておくと、残った根から再び芽を出して立派な物が出来るのであった。

食べても、食べても有って終いに半分程は食べ切れずにあったら、立派な種が沢山取れたので、近郊のみなさんに分けてあげた。又、町の日本人の野菜屋さんに持って行って、皆さんに、あなたの手間代だけで安く分けて下さる様にと置いて来たのであったが、珍しい上に立派な種なので、そこの主人が驚いて居られた。

私は、これがロンドリーナに広まったホーレン草の殆んど始まりではなかったかと思っているのである。

このキタンダの主人の名は忘れたが、店はセルジッペ街のアベニーダ・サンパウロとルア・ミーナス・ジェラエスの中間にあった。

この店、くだもの店の右側のサロンでマカロン　（ウドン）を食べさせていた。若い時、隣りの石川さんに誘はれて入って、「君たちは若いのだから、食べろ、食べろ。」と、すすめられて、私と大西様の繁雄君とで、マカロンを、大きなどんぶりで三杯宛食べた事がある。私には一生の記録なので忘れられない。この石川敏様も此の本を待たず九十六才かの長命

で亡くなられてしまった。
私が昔話を書き出して見ると、生きていて読んで下さったらと思う人が大方亡くなっているので全く淋しい思いをさせられる。
昔の人のいなくなった後に昔話を書いてもしかたないかとも思わせられている次第である。
故人の冥福を祈る。

第十六話
始めての味噌作り

ブラジルに来てすぐ入った処は町から二十八Ｋｍも奥地だったので町の商人の一人が二ヶ月に一回位、前回に注文しておいた物を届けてくれていた。二トン積み位のカミニョンであった。
それで日用品はまあまあ間に合っていたのだが、不自由したのは、野菜であった。
それでも森林中にパルミットヤシが林立していたのでその芯が野菜で助かったものである。
今日では到底及びも付かないぜいたくな話であるが、慣れていない処に、それしかないという事になると、今日の様な貴重品を食べている様な気持ちではなかったのであるが、初めから案外においしかった。その内に雨期に入って来ると、

道べりなどに一M位の水々しい柔らかな草が生えてきたのを親が見て、これは日本にもある草で食べられる筈と言って、うでて、おひたしにして食べてみると変った匂いはあったが食べられて腹もこわさなかった。

そうした或る日、父が「味噌を造ろう」と言い出した。母が「そう言っても桶が無いのをどうするの。」ときくと、父が、「桶も作る」と言う。そして、翌日畠に行って、セードロの直径五〇センチ位の木を、六〇センチ位の長さに切って、穴を掘り出したのであった。父は昔北海道の開拓時代に両親と働いた事があったので、臼を掘る為に三十センチ程の長いマッシャード（マサカリ）と、臼の中の仕上げをする為の臼クリという道具をカジヤで作らせて持って来ていたので、五〇センチ位の穴はそれ程の苦労もなく掘れたのであった。ノミで仕上げ案外にキレイな桶が出来上がった。木の芯の割れ目にはボロを詰め込んで当分水桶けに使ってみたが水は洩らなかった。その内に大豆が届いて、みそを漬け込んだのである。

こうじの種も遠くの旧移民から分けてもらって来ていて、まあまあの物が出来て喜んでいた。

ブラジルは暖かいから三・四ヶ月もしたら味噌が食べられると、期待していると、或る日母が、「味噌の水気が無くなっている。」と言い出した。何時の間にか底からしみ出てしまったらしい。父が、「水の時は洩らなかったが、塩水になると洩るのかも知れん。」と一寸残念そうであったが、あの出来そこないの味噌のそのあとでどうしたのか捨てるはずは

ないが、私には憶えがない。桶は少し乾燥してから、米びつとして使っていたが、パラナに来る時松岡という人が六Ｋｍ位のところから元気の良い息子さんを二、三人連れて来られて、大木をくりぬいて造った風呂桶等と一緒に、私達が遠方に引越す為に持って行けない物で、役に立ちそうな物は持って行かれた。その味噌桶もいっしょであった。

風呂桶などそのトタンの一部をはがして、長い棒を通して二人でかついで行かれたのである。

ちょうど映画の時代劇のカゴかきのかっこうであった。六Ｋｍの山道はかなりの距離であるが、自動車も馬車も近所には無い時であるから出来る事であった。

此の時に別れた松岡さんの事は、長く気に掛っていたが、その後ついに再び会う事はなかった。

第十七話　臼掘り

着伯した年はモチ米も無ければ　籾もないので臼の必要はなかった。旧移民はモチ米の収穫をしている人も居たろうが、私達は旧移民とは相当に離れた植民地の、最奥のロッテ（地区）に入植したので、古い人と親しく交際の出来ない内に十ケ月を過して移転してきたので、此の年は餅に縁は出来なかった。

翌年も、ロンドリーナに移って来たが、臼の必要はなく、その翌年から、必要になって来た。

それは初年度に植えた米が取れ、イナキビも良く取れたか

らである。食べる米を町の精米所に持って行くカローサ（馬車）は植民地に一台も無い時代であったから、小川にバッタリを仕かけてモミを撞く事を考えた。しかしバッタリをかける前に既に臼を掘って手でついたのであった。

そこで臼であるが、一般ブラジル人も籾をついて白米にしていたが、ブラジル人の臼は、おとぎ話しの兎の餅つきの画に出てくる様な細い木で造るので日本人の考える臼に此べると臼らしい物ではない。それでも立て目に穴を掘らなければならないので骨を折って造っている様子であった。

先づ第一に臼クリと云う道具が無いので臼を作る木の上をマシャード（マサカリ）でキズを付けて、先ず始めに火を燃やして窪みを作るのである。しかし、火ではキレイな穴にはなるものではなくその後の仕上げには大変苦労している様であった。と言うのは、底や周りを丸く臼らしく仕上げているものが少ないので分るのであった。

近所に入植した、福岡から来た人も、遊びに行って見ると、家の前に臼を造ろうとペローバの木を据えて、その上で火をもやしていた。材料は外人達とは違って、直径五〇センチをこえる立派な木であったが、火を燃やしているのは可哀想であった。火の下を燃やそうというのであるからむつかしいのだ。

そこで、私が道具を持って行って、掘ってあげて喜ばれたのであった。私の家には、父が北海道の開拓で臼を掘る道具を知っていて、渡伯のときにカジ屋さんに注文して作らせて持って来ていた事は前の項で書いておいた。臼という物は道

具がないと容易に掘れるものではないのである。
マッシャードで荒堀りしても、火で燃やしても、臼らしい物になるものではない、どうしても臼クリと云う道具が必要なのである。特にモミをつく臼は深く掘って、返りといってモミが返って来る様に、臼の表面より中の脇を深くクリ込んで置かなければならないのだ。そうした法則に叶った臼は、臼クリと云う道具なしには掘れるものではなかった。従って私の家の様な臼は無かったのであったが、うちの道具をだれにでも、貸してあげたので、それで作った人は何人も居るわけである。餅つく臼は、その内にセメントで作る様になった。木の臼はどうしても木の中心部から割れ目が入り、其の内に腐れて来て、木のクズが餅についてくる様になるのであるが、セメントの臼はその点、衛生的でもあり、腐る事も無いので案外に早い時期に作り、今の住宅にも据え付けにして作ってある。
その後日本製の餅つき釜を用意したので、臼を使う事は少なくなって来たが、それでも時にはつく事がある。
日本人と餅の縁は仲々切れそうもない。

臼の思い出の一つには、近所の人でペローバやマルフィンという木などで作って、その木のにがみを取るのに苦労されていた事を思い出す。モチをついてみたらにがくて往生していると言い乍らにが味の有るモチを頂いた事が有る。
臼にお湯を満たし、苛性ソーダーをたっぷり入れて置くと、その内に取れたと言う事であったが、私の家では、始め

からにが味のの有る木では作らない様に気を付けていた。
にが味の無い堅い木となると大体ガリッタと云う木になったが、堅い木で骨は折れたが良い臼が出来たのであった。
この木若し臼にでもならなければそれ以外には何の役にも立たない上に堅くてじゃまな存在であった。

第十八話

火　事

アフリカ廻りの長い六〇日余りの航海を終えてやっと契約して来た、日本政府と半官半民の海外興業株式会社通称『海興』が開発しているセッテ・バーラス植民地に到着したのは一九三三年の早七月三十一日になっていた。海興の土地を日本で契約し、初年度の地代を入金して来る家族を、移民といわず植民と言っていた。そうした方法でバストス植民地にも、日本から直接入植した家族が相当に居たのである。私達はバストスが満植となっていたので、セッテ・バーラスにしたのであった。同船者としてアリゾナ丸で同植民地に来たのは何故か、この時は七・八家族の北海道の人ばかりであった。

初年度の土地代を入金して来たとはいいながら、自分の土地が決められていたわけではなく、売れていない土地を視察して決める余裕があった。又、既に開拓された土地で、売り物があれば、個人的に権利金を払って、それに入いる事も

出来て、二・三家族はそうした人もいた。そんな事で、二・三日は植民地内を視察し、夜になると会社の事務所に集合して、開拓の方法、蒔付の時期、植民地の将来などに付いて係員の説明が続けられていた。

そうした希望と不安の交錯した気持の中でバタバタとしていた時に、一先輩植民者が希望半ばに死亡し、更にその埋葬中に住宅が全焼するという事件がおきた。

父がその話を聞いてきて、私たちに話してくれた事を思い出すのである。

人が死ぬ事は致し方のない事であるが、入植間もない、経済の安定しない内に主人を亡くするという事は大変な事である。更に此の家の場合、埋葬に行った人の留守中に全焼した。昔から、同じ火事にあうにも、葬式の日に火事にあった家は、復興するのに大変長く苦労するものと言はれているので、お前たちも葬式の日には留守に残った場合、特に火に注意をしなければいかん。と　こんこんと注意を受けた事を思いだすのである。

同じ全焼しても、葬式の日の全焼は後に苦労するというのは、何か因縁的な事か、又、その日は家に残っているのが女性や子供の事が多く、貴重品や家財道具を運び出す事が難かしいので、その被害が大きいからか、その事に付いては聞き洩らした。

いずれにしても、主人を埋葬して帰って見たら、家が全焼していた。ただ呆然と灰に帰した我が家を見つめる気持は、とても他人では察しょうとしても察し切れないものであろ

う。

それは入植当時でお互いに楽でない中から死亡という事で頂いた御香典迄焼いてしまって、今晩の夕飯はどうする、寝るのに布とんも毛布も無い。又、貴重品も有ったであろうし、それ迄の人生の思い出の品々もみな灰となってしまったのであるから、気のどくと言うより悲惨である。その話を聞いた私たち移住者は、何枚かの着替え等集めて差し上げた様であった。

その後六十年、ブラジルは日本と比べては、火災のない所で、殆んど火事場に出会う事はなかった。又、火事が有っても隣家に延焼するという事は殆んど見た事が無いのは有難い事であった。市内では時々漏電で火災は有るが、隣り迄引火して焼けたという事を聞かないのは家の構造の違いであろう。これは有難い事である。

木造の場合は、隣りとの堺を二米程お互いに離さなければならない規定があったので、類焼は免れていたのである。

昔から日本人には恐ろしいものに、地震・雷・火事・親父と言う表現が有ったが、ブラジルでは地震も無ければ、火事も少ない。雷は、ゴロゴロとなるタイムは確かに日本の記録とは比べものにならない程長く引張るが、落雷の害も少ないもの。親父になると、移住して苦しい時代が長かったからか、息子の教育がブラジル語であったからか、一般に親父の権威が低くなっていて、子供に遠慮した暮しをしている人の方が多いようだ。

第十九話

ペスカ　（魚釣り）

パラナの有名人でアサイ植民地に住んで屠た、故頼則照雄氏の弟の栄君が、昨年亡くなったので、思い出した。

照雄氏は、親の家族が渡伯する時には既に家庭を持っていたので、一緒の渡伯は出来ず後に残ったので、戦争に会い、出征もした。激しい戦場に出向いて、功〇級の金鴻勲章に、勲六等の叙勲もしておられたのである。

後日一九三七・八年頃ではないかと思う頃、親を頼って移住してきて、一、二年ロンドリーナの親の処にいて、後アサイに独立されたのであった。

私がここに書きたいのは、その後に残った次男の栄君の事である。この栄君のペスカ　（魚取り）好きは有名であったが、兄さんも亦晩年はペスカを楽しんだそうである。いや此の二人だけでなしにお父うさんも好きであったかと思う。二・三回親子で出かけるのを見た覚えがあるし、一度誘はれてウライの横を流れているコンゴインニヤ河に行った事がある。

話は一九四〇年頃の事になるのであるが、私の土地のカレアドール　（作道）　を新しいシャレッタ　（二人乗りの為の馬車）　で栄君と憐りの吉村氏が軽装で下って来た。『お宅の道を通らせて頂きます』との挨拶であった。母が、『どちらに行かれますか』と、尋ねると、『これからペスカに行くと

ころです』との返事であった。そして更に『これからも此処を通らせて頂きたいのですが宜敷くお願いします』との事で、『どうぞ、どうぞ』という事であった。

その日はそれで済んだのであるが、この二人のペスカは何んと毎日毎日の事なのであった。

何ヵ月かした或る日、母がカレアドールで行きあって『良く精が出ますなあ、毎日毎日休みなしでーー』と、いうと、『いやあ、土曜と日曜だけは休んでいるのですよ』と、いう返事が返って来たのであった。

私たちと反対で、セマーナ（週日）は遊んで、遊び疲れるから土曜と日曜だけは休む。などと、どうしてそんな事が出来るのかと考えてみたが、この両家とも畠仕事の上手な人たちであったし、弟さんたちが居たので、草取りなどには手がかからなかったのであろう等と思っていて、実際の事に気が付かなかった様な気がする。

思い出して見れば、昔から、魚屋さんの店には此処らの川や池で取れる魚は、小魚のランバリー（小さいフナの様な魚）迄売られている。それから思えば頼則、吉村氏らの魚も店に出ていた筈だ。そうでなければ、毎日毎日魚を持って来られたのでは料理する者も、食べさせられる者もたまったものではない。それに冷蔵庫も家庭にはない時代であったから尚更である。

この事に気がつかず、良くペスカで遊んだ人と長い間誤解していた事が申し訳ない気がする。

余談になるが此の二人、野球が好きで、カンポに来て野球

を見ながら、ビール瓶のカケラでバットを削っていた姿が眼に浮ぶ、中央区のチームのバットは殆んどこの二人の製作で有ったが、全く上手な出来ばえであった。

又　栄君は時々選手として外野に立っていたのである。

第二十話

完成を見ない邸宅

前にセッテ・バーラス植民地で某家が、二階建ての大きな家を造っていたのに驚ろいた事を書いたが、あの時に驚いたのは唯大きな家という事ではなく、あの地方にはセラリヤ（木工場）が無く、柱の一本一本から、何百枚と必要な板も一枚二枚、仕事の合間に自分で木挽きして建てているという事であった。

又、父といっしょに歩いて居て、道べりで働いている人に一寸挨拶すると、見ず知らずの人であったが、人に会う事が少ない時代であったからか、道べりから七・八〇Mの自宅へちょっと寄ってくれと誘はれて立ち寄った事がある。此の人の家も、板作りの三十五・六平方Mの小さな家であったが、二年程かかって、やっと住める様になったといわれていた。この人も板を自分で挽くのでなかなか捗らないのだという事であったが、中の仕切は出来上っていなかった。

仕事のひまをみては、仕事より重労働の『一升飯を食べ

る』といはれる木挽をして、我が家を造るという初期移民の希望と努力は、子孫の忘れてはならないものの一つであろう。

こうして、ジャングルを拓き、住宅を建てて、次第と生活が安定してゆかねばならない植民地に、一九三四年正月、沼田、加藤、大西の三氏が北パラナの視察をして帰り、ボツボツと出穂の始まっている稲の収穫の終り次第移転して行く、と言う事が、先づ同船者に伝わり、その近所にと知れて行った。

従って視察をついだのは同船者が二組に分れて決行し、それに引継いで、その他の人達が、数人づつ誘い合せて視察に出かけた。

その三・四組の視察者が、中継地として、植民地の一番奥の私の家に一晩をゴロ寝して、翌朝未明に松明を作って出かけたのである。早朝に松明を頼りに出発したのは、夕方明るい内に人家の有る処まで届きたいという、時間を考えての行動であったと思うのである。ジャングルの中のどの辺までか、先年亡くなった兄が案内していたのであった。

又、私の家を利用しない人も有ったろうし、近所の人の視察報告を聞いて移動した人もあった事であろう。とに角セッテ・バーラス植民地は半数以上の脱出となってしまった様であった。

そして、その移動先が、私は、殆んどロンドリーナ周辺の国際植民地であったと思っていたが、そうばかりでは無く、その頃オーロ・ブランコ（白いお金）といって、棉作が人

気を呼んできたのでパウリスタ沿線、ソロカバナ沿線などの棉作地帯に移って人も多かった様である。

又珍しいのは、海岸山脈のどこかで、地下に坑道を掘って雲母堀りをする労働者となって行った人もいた。とにかく、翌年、同船者は全員この植民地を転出したのであり、一、二年のうちに植民者の半数以上の家族が他地方に移動し、植民地は大変に淋しい状態となっていくのであった。いや事実上崩壊したのである。

従って、希望にもえてあの大邸宅を板を挽きながら建築されていた人も、あの動揺の中では家の完成は出来なかったのではないかと思うのである。もったいない話である。

植民地を造成する人は地の利とその将来性を良く考えて、多くの家族に迷惑をかけないようにして欲しいものであると思った。

然し、ブラジルの様な広大な土地が開拓される初期には、将来の事など入植者が考え出して行くべき事であったかも知れない。

とにかく日本移民の初期には、随分と無埋な植民地が開かれた様である。又、外国人の拓いた植民地にも、良く辛棒したものだと思われる所が沢山ある事を思うと、一慨に創設者の責任を問う事は正しい事ではないかも知れない。

結局は良い植民地に入植出来た人は、良い運命を持っていたという事で、初期には誠心誠意で考えても、何所がどうなるか人智では知る事が出来なかった事でもあろう。それを後の人が勝手な批判をしては申し訳がない。

（参考）アルゼンチンのパタゴニヤ地方を旅行したとき、英国人の開いた町があった。雨が降らず、何も出来ない処で、海岸に近いので海のアザラシを食料にしてやっと生活していたらしいが、或る時一老婆の発案で運河を人の労動力だけで掘る事にしてアンデスの雪解け水を引いてくると、その両側だけ作物が出来る様になったと説明してくれて驚いたのであった。

なんとその運河、鍬とツルハシで掘ったというのに延長一八〇キロあるというのである。

私はこの開拓者の話を聞いた時、胸にジーンと熱いものを感じたのであった。

第二十一話

ヒコーキとロンドリーナ

一九三一年に北パラナ土地会社が、現在のジャルジン・シヤングリラー、当時のフアゼンダ・コアッチーに試験用に六万本のカフエーを植え付けてから、鬱蒼たる人跡未踏の、北パラナ国際植民地のジャングルが、物凄い勢いで開拓されていった。

トラクターもなければモトセーラ（チェンソー）もない。唯マッシャード（マサカリ）とフォイセ（大鎌）の全く

の人の腕力だけで、あの広大な面積の開拓が進むのであるから驚くばかりである。

三十四年六月には、ロンドリーナより二十五キロに足りないローランジャ止りであった道が三年後には八〇キロ延長されて、マリアルバ地区の開拓が始まっていた。内村氏はテントの下で、壁無しの状態で寝起きして、開拓にかかっていたし、桜井氏は、早くもヤシの小屋を建てておられ、既にカフエーが植付られていた事を思うと、前年の三十六年の入植であったろう。

してみると二ケ年で八〇K　m開拓前線は進んでいたことになる。

私は此の頃、当時の事を昔話として少し書き残して置きたい気持で振り返って見るのであるが、或る物事は案外に詳しく思ひ出し、或る物、例えば此の項で書きたいロンドリーナとヒコーキに付いては記憶が悪いのである。

一九四五年に母が急逝したが、それ以前にテコテコがロンドリーナの空を飛んだ事は間違いない。

と言うのはテコテコの飛ぶのを見た母が、

『北海道の札幌市に、大正の始め頃米国人のスミスと云ふ飛行士が、テコテコ機を持って来て飛んで見せるというので、広い野原　（飛行場はなかった）　へ見に行くと、一人幾らと見物料が取られた』

と、話した事を思い出すからである。

一九四九年にはファゼンダ・　コアチーのカフェが抜かれて市街地を造成すべく、ジヤルジン・シャングリラーと命名して売り出されたのであるが、その時の宣伝に、テコテコ機が宣伝文を書いたファイシヤ　（幟）　を引張りながら飛んだのを、見覚のある人は多いと思うのである。

然し此の四十九年には、既に旅客機の定期便が、サンパウロとクリチーバ間に飛んでいたのである。処女便は四十七年の五月十五日で、大型機の二十三人乗りと書かれている事には今昔の感がある。

当時はサン・ルイスに向って八Ｋｍ行ったパリヤーノ氏の耕地に仮設された舗装のない飛行場で、発着の度毎に土煙をあげていたわけである。雨の後は、滑るので乾くまで発着共に出来なかったであろう。又夜間の発着も出来なかったであろう。

夜の事になると、新らしい空港に移ってから一時期、夜に飛び立つ便には大きな割引きがあって利用した事があるが、その埋由は調べもしなかった。

パリヤーノ空港であるが、此所は臨時で有ったからロビーらしい建造物は何もなかった。

ここから航空便が飛び始めた四十七年には、現在の空港の工事を着工したのであった。

六十七アルケールと言はれた初期の空港の殆んどが、日本人の所有地を強制買収したものであった。世の中、発展する半面にいつも犠牲になっている人の有る事を忘れてはならない。

尚又、私は根性をまげて、考えて見ると、終戦直後の事であったから、敗戦した日本人の土地は安く買収しやすい、と此方の人に考えられた戦争の犠牲ではなかったかと思っているのである。

そこでロンドリーナに於けるテコテコ機の初飛行であるが、飛行クラブの結成が四十一年で、活動開始が翌年とあるから、四十二年には飛んだのではないかと思うのである。

一九四五年から二・三年の間、日系の斉藤哲夫飛行士が来て指導された事を覚えている人も　少なくなった。やはり五〇年前の事は昔話で書いてなければ忘れられてしまうのである。

第二十二話
海岸山脈の先住民

海岸山脈のふもとの、セッテ・バーラス植民地は、リベイラ川畔にあるセッテ・バーラス町（港）　に事務所を構えて、此処を拠点として奥行三十Ｋ　ｍ程の植民地が計画されていた。

私達の来た昭和八年頃は、既にセッテ・バーラス区は開植数年を経ていたらしく、殆んど満植で、次のキロンボ区が人植三周年記念の演芸会を計画していたが、この三ヶ年の間に七割も八割方も入植者が有ったらしく、その奥のマンパーロ

区に入植する為に移る時にも、余り原始林の中を通る様な事はなかった様に思う。

それがマンパーロ区に入ると大変なジャングルであった。これがその頃から売りに出された区域であるからその筈である。

それでも此の区域の所々に、先住民が勝手に入って暮していた。

此の人達が、自分達に先住権が有るとて、植民会社と裁判をしているとは知らず、近くに居る人々とは交際をし、少々離れている者でも、労働者として働きに来てくれたりして、言葉も通じないのに交流は出来、人の居ない全くのジャングルの中とは違った楽しさを味わっていたのである。それにしても今思えば、人跡未踏のジャングルの開拓を覚悟していたのに、案外に多勢の先住民が入っていた事に思い当るのである。隣りの大西氏の土地の道べりには二家族住んで居り、加藤氏の土地の人は既にどこかに移動して居たので、そこへ我々三家族は長屋を立てて、一時、ジャングルの伐採をする間暮らしたのである。その伐採を半分はお互いに請負師に請負はせたのであるが、その講負師の使う労働者が、加藤氏の一方の会社があけた境界線を伝って通ってくるので、伐採は我々三家族のほかに同船者の宮崎氏も遠国氏も請負わせているので、一一・三十名の男が集められた筈である事を思うと、此の奥に相当の数の人が住んで居た事になる。此の人達がそれぞれ先住権を主張して、会社と争っていた様であるから、会社側としては、頭の痛いことであったのである。

事情を知らない我々には、労働力は有り、一寸した交際ができるので、覚悟していた「人に会えない」淋しさは、大いに緩和されていたのである。

或る日、彼らの住んでいる処に川が有って、魚が取れるというので釣りに行くと、余り遠くない三キロ程の処に彼らは住んでいて、家の前に十M巾程の川が有り、彼らの交通は小さい丸木舟で連絡されている様であった。

この川で釣れる魚は小さなフナに似たランバリーという魚であった。

或る時、べんとうを食べてしまって長遊びをしたので腹をへらし、ご飯を炊いてもらって、卵をかけて食べた事が有ったが、支払する段になると、言葉が適じないので困っていたら、奥に入ってアイロンをかけた様なパリパリのよごれのない紙幣を持って来て、コレとコレとで良いというので支払いが出来た事があった。此処の人達は金を使う機会が少ないからか、入った金は汚れを落しアイロンをかけて大切にしまっているのであった。

服装も普通で裸の人は居なかった。カフェーの無い山奥であったが、カフェーを飲んでいて、遊びに行くと先ずカフェーをわかしてくれるのであった。酒の飲める人にはピンガを振るまってくれた。彼らもピンガは常備していたのである。

六十年前、海岸山脈の山奥に先住していた外人達は、インジオ族ではなく普通のブラジル人であったのである。

或は此の人達は、日本人の会社が植民地を拓く事を知ってから、将来立退料を貰う考えで、入り込んだ案外新しい人達であったのかも知れない。古い事を証明する、ミカンやその他の果実の木などは、目に付かなかった。有るものとてはバナナが少々植えられていた位で、畠らしい畠も作っていなかった。考えてみればどうして生活していたのかとふしぎに思われる位である。

それでいて、着物などは老人から子供まで、それほど見すぼらしい事もなかったのである。

又、植民地と関係が有るのではと思うのは、私達のロッテが植民地の最奥であって、そこ迄は何家族も湧き水を頼りに住みついているのに、その奥の政府の土地は莫大に広いジャングルが未だに有るのに、当時から誰も住みついていないのである。

従って会社が測量を入れてからの侵入者であったのかも知れない。

第二十三話

子供が鉄砲を作る

私は一九三三年の渡航で、十五才であった。現在（二〇〇一年）八十三才であるが、渡伯当時の子供たちと、それから十年程して結婚してから出来た子供らと、その子供即ち孫らの時代との遊び方が大変に変化して面白いが、此方もうっかりしていてはならないと思う。一家に暮らしておれば、ヂイチャン・ノン・サーベ・ナーダ。バアチャン・ノン・サーベ・ナーダ（ヂィチャン　何もわからない。バーチャン　何もわからない）といわれては残念だし、言う孫にも良くないから、子供の遊び方でも、社会の移り変りにも少しは気を付けて置きたいものと思う。

近頃の子供は、ビデオ・ゲームやコンピユーター・ゲームを楽しむ。白転車でも、カンビオ（ギア）付き、そのカンビオでも、三つや四つでは面白くない十五だ、十八だという時代であるから、昔の子供の遊びはこうだったと言ってみても仕方がないが、我々が振り返ってみると楽しい事もある。

一九三〇年から四〇年頃の国際植民地の開拓時代の少年たちの遊びはシチリンギ（パチンコ）による小鳥打ちが多かった様だ。町に行ってボラッシャリヤ（タイヤの修繕屋）から古カーマラ（古いチユーブ）を貰ってきてハサミで切って作っていた。又木にしばり付けるにも、カーマラを細く

切ったものでしばりつけていた。ゴムテープがなかった為であろう。既に私の時代ではなく、一番下の弟が十才違うので作る手伝いをしてやった様な覚えがある。

又の木も、日本では板を切って作った覚えもあるが、此処では木の枝がいくらでも有るので簡単であった。

その弟の友だちが、集って小鳥打ちをするらしいのであるが、友だちの中には上手なのがいて、良く小鳥を落とすという事であった。特にずば抜けて上手なのは、今川省三君であったという事である。現在エスポジソンのあるパルケ・ネイ・ブラーガの憐りで苗木商をしている今川商店の先年亡くなられた御主人の事である。鉄砲でも、シチリンギでも全く良くあてたという事であった。

ある日弟が遊びから帰ってきて、言うのに、『今日は作った鉄砲で小鳥を取った』という。

『どんな鉄砲か』と聞くと、発火は、おもちゃのピストルに使う紙に一寸火薬をつめてあるものを乗せて置いて引金を引くとバネがはずれてパチンとその火薬を挟むので『ぱあん』と、音といっしょに火が出る、その火が鉄砲の筒の中の火薬に引火して爆発し、玉が飛び出す。台も上手に作って本物の様だとの事であった。

それを聞いた父が、驚ろいて注意に行くのであるが、此の鉄砲製作者は、今川省三君ではなくて、一軒おいた隣りの槙枝氏の契約者の子供であったとの事であった。槙枝氏の処には契約者として中川某氏が入って居られたので、中川氏の子供さんであったかも知れない。それにしても十才前後の子供

が良く作ったものである。
砲はカンノ（鉄管）を切って作ったというが、玉が後戻りしない様に考えられていて、何匹かの小鳥を落したとの事であったから驚きである。それでも此の鉄砲、事故をおこさぬ内に納まって安心した。一時は植民地の話題であった。
然し考えてみれば、可哀相であったのは当時の少年少女たちであった。青年にはカンポを造って野球、陸上と楽しませ女性達には、その応援などに女子青年会等も組織されていたが、少年少女たちには何が有っただろうか、シチリンギでの小鳥打ちか、木登り位の事であってみれば、女の子が良く木登りしたとか、子供たちが畠の西瓜に穴をあけて歩いたとか、言ってみても仕事に迫われている初期の移民の親達の犠牲になって、これという娯楽のなかった子供たちの事を考えてみると何か申し訳ない様な気がする此の頃である。

子供が鉄砲を造ったあの時にその気が付くべきであったのである。
方々の植民地にカンポは造ったが、子供らの為にブランコや滑り台等を据えた処は殆んどなかったのである。
初期移民は幼少年に迄は手がまわらず、大きな犠牲を与えていたのであった。

第二十四話　トカゲ

私たちは、トカゲという言葉は知っていたが、三Ｋｇもある、一寸ワニかと思う様な大きなものが居るとは、ブラジルに来て始めて知ったのである。

一九三三年の八月初旬に渡伯して、直ちに海岸山脈のふもとのセッテ・バーラス植民地に人植したのであったが、先ず

寒いのに驚いた。常夏の国と思って来たのに、ところどころに霜が白く降ったのである。それで霜には一応驚ろいたが、こんな事で冬が終ったのなら、半年雪に埋まる北海道を思えば冬とは言えんと思いなおし、三ケ月もするとジャングルの伐採した処を焼き払い、焼き残った小枝などを少々片付け、畠に直接に稲の種蒔きが始まった。畠は五町歩の開拓であったので半分程の二　三町歩を蒔付けた頃から、ビックリする様な大トカゲの出現となって来るのであった。

セッテ・バーラス地方のトカゲは、三キロから七キロ位も有るかと思はれる程大きいのである。

パラナに来てからもトカゲは現れたし、近所の旧移民の家族では「トカゲを取ったら、捨てないで持ってきてくれ。鶏一羽と取替えてあげる。」と、いう人がいた。

私は取替えてもらった事はないが、此の人が、鶏と取替えても食べる価値が有る程うまいというので、一度食べてみたが、大体『いか物』は嫌いなので、特別うまいとも思はなかった。しかし、別にいやな臭みもなく、魚のような白い肉で柔らかく、けだものの肉としてはうまい方であったろう。

然しその大きさではセッテ・バーラス方面のトカゲとは一まわりも二まわりも小さい。大体トカゲは逃げ足が速いので容易に捕えられるものではなく、その大方を取り逃すので、逃した魚は大きいと、皮肉られても仕方はないが、事実セッテバーラス地方のトカゲは大きいのである。

そしてトカゲは身長の半分が体で、半分はその太さは胴体よりは細いが、かなりに太い尻尾であり、この尻尾が、肉も

多く食べ易いのである。
ところが、トカゲは迫い詰めて尻尾をつかまえると、つかまえられた処で尻尾を切って、というか、はずしてというか、とにかく尻尾をおいて逃げるものである。そして尾を半分も抜かれた場合は、尾が普通に有る場合の様に走れない。尾が軽くなったので調子が狂ってドタバタと変な走り方になるものである。
又、切られた尾は再び、生えてくるものである。カニのハサミも、もがれると再び生えてくるもので、片方のハサミが若い小さいのに出合うことがあるが、トカゲの尻尾も同じで、切れた処から細い尻尾の生えてきているのを見た事がある。

尻尾を切られたトカゲのおかしな走り方を見た神様の慈悲心が、再び新らしい尻尾を下さる事になったのであろう。
自然はうまく出来ているものである。
トカゲは又蛇と同じように鶏の卵を食べにくるのであるが、トカゲは大きな口を持っているのに、卵に穴をあけて中身を吸って行くが、蛇は小さな口からひまをかけて丸飲みしていき、高い処から飛びおりて飲み込んだ卵を割るという事である。蛇が飲んだ卵を割る為に高い処から飛びおりるのは見た事はないが、卵を飲みこんで逃げるのを見た事はある。細い蛇でも卵の入った所だけ丸く太くなっているのである。蛇を殺してみても、それ程太い食道らしい物が無いのに、自分の胴廻りより余程太い、かたい鶏の卵や、大変に大きな蛙

などを飲み込むのであるが、その味は胃袋で解ることになっているのであろうか。丸飲みであれば舌で味は解るまい。
又、大きな蛙を食わえたところを見つけた事があるが、この時も蛇の胴廻りより相当大きな蛙であった。私たちに見つかって、思う様に走れずに逃げるのに苦労していた。私たちも毒蛇でなかったので、この時は見逃しておいた。

第二十五話

入　歯

我々の歯は、その人によって、強い人と弱い人があるもので、それは仕方がないのであるが、ブラジルでは日本で暮らすより歯が早くだめになるようで、移民した者同志でも早くその事に気がついた。
ブラジルの食生活では、ほとんど海産物を食べる習慣がなく、特に小魚を骨のまま食べる事などなかった。副食物の殆んどは、牛や豚に鶏の様な肉食である上、日本人の大方の人がお茶をやめてカフェーを愛飲するようになった。
このカフェーに毎日使う砂糖が相当な消費であった、兎に角移民して間も無くから、六〇Ｋｇ入れの俵で買ってくるのであった。度々町へ買物に出ておられない、という事もあったであろうが、とにかく、砂糖を良く消費した。暖かい

国では体が要求するのであろうか。
その結果として、カルシユーム不足と、砂糖の取りすぎが歯をいためるらしく、歯医者さんのお世話になったわけであるが、当国のいわゆる外人の労働者階級では、歯のぬけるに任せて不自由している人たちが多勢いたものである。
又、その為にデンチスタ（歯医者）の看板は至る所に出ている。誠に歯医者さんの多い国であると思う。
例に洩れず私も歯の治療を二十代から始め、四十すぎには、総入歯をすすめられたが、出来るだけ、根のしっかりしている歯は、抜かずに手当をして、親からもらった歯の最後の一本と涙の別れをしたのは六十五、六才の頃であった。
いよいよもたせる歯が無くなって、どうなる事かと心配していると、歯医者さんの技術で、総入歯が案外にしっかりと納ってくれて、大方の者が食べられるので有難い。肉や大根の漬物までバリバリと食べられるのである。
妻は現在八十二才であるが、下歯はまだ何本かしっかりした歯が有って、それに持たせて、いわゆる橋渡しして何本かの入れ歯はしているが、自分の歯が何本かしっかりしているのである。私より強い歯を持っているわけである。
ところがブラジルでは案外早く総入歯にしている人がいるのである。

この話は既に久しい昔の事であるが、ある時一人の娘さんを知り合いの青年にお世話をさせて頂いた事がある。私と兄とで大変似合いの縁だからとすすめると娘さんの方でも喜ん

でトントン拍子に決るものと思っていたが、仲々縁談とはそうはいかないものである。年寄りがいると尚更かも知れない。現今の様に恋愛で二人が決っているのであれば仲人は形式で良いが、見ず知らずの者をまとめようとすれば、そう筒単にはいかない。

「娘の気持ちを聞いておきます」「家族と相談をしておきます」「親戚との相談をさせて頂きます」「みなさんに連絡しておいたのですが、都合が悪くなって集れない者がいたもので…。」等々で経験の無い者にはわからない事があって、仲人役もそう簡単にはいかないものである。

此の縁談の時はどの位い足を運んだか忘れてしまったが、いよいよ今度は承諾してくれるであろうと思って出かけると、

「実は娘に問題が有るのでーー。」

と、お父さんが話されるには、

「娘を貰って頂ける事には、相手に何の不服も有りませんが、実は娘は歯が弱くて、歯科医に良くお願いしたのですが、歯槽膿漏もひどく、歯を残して置いては健康を害してしまうと言う事で、若いのに総入歯なので気が引けて、困っているのです。」

と、言う事であった。先ず私が吃驚した。二十才そこそこの花嫁さんが、どこかのお婆ちゃんの様な総入歯とは考えて見ても一寸艶がうせるとは思ったが、そうはっきりも言えないので

「そうでしたか、然しその事では、今後歯の痛みで苦労する

事もないのですから先方に承知してもらうように話をして来ます。」
と言って、一旦引上げて来たものの、さっと、その足で青年の家に行けなかった。
どう話しを進めたものかと一日、二日思案してみたが、別に名案が、浮ぶ事もないので、余り遅くならない内にと重い足で出かけた。行ってみると青年にも、末亡人の母親が居られた。
少々の世間話のあと、致しかたなく娘が総入歯であった事を切り出すと。
「ああ、沼田さんその事なら心配入りません。つらい歯痛に悩む事もなし、それにうちの息子も同じ総入歯です、…。」
と、いう事で、案ずるより産むは易しと、めでたくまとまったのであるが、この様にブラジルの生活では早く歯をいためる人が多いのである。

第二十六話
トイレ

ブラジルに移住して、いやなものの一つに、町の中や旅行中に使わされるトイレの不潔な事があった。
『あった』ではなく現在でも時々あって不快な思いをさせられるのである。

それが、バールやレストランで有る場合には、その主人の性格のおろかさを思う。

ブラジルの場合、トイレの改装と、清潔に注意するだけで、何割もの客集めが出来ると思う。

又、バスで歩く場合、長距離バスの発着所は、大体気を付けているようになって来たし、空港や、ホテルは、気を付けているので此の頃は助かる。公共の場所では、料金を徴集しても清潔にしておいて欲しいものである。

先日、イピランガ独立記念塔の地下のトイレが不浄物一杯で使用の出来ない事になっている、との事であったが、これも有料にして清潔を保ってもらいたいものである。

国民の常識が高まって、無料で清潔が守られるのが一番望ましいが、それは急には無理なので、急場には有料にするより仕方あるまい。私はここでブラジルの悪口を書きたいわけではないが、日本とは違って、此処の人はブラジル人も日本人もトイレの事に付いては妙に不精になっているので、面白い事に気のついた人がいる。

それは、若い青年が、或は青年をもつ親がどこかの娘を見に行った場合、昔は向うの母親をよく見て来い、娘は必ず母親そっくりになるものだといわれたが、此処ブラジルでは「一寸おねがい」といってトイレをかりて中を見てくると、娘の性格が良く解るという。トイレの中の、整頓、清潔の度合いが、そこの娘の程度だ、というのである。私は全く的を得た考え方だと思う。

又、別のトイレ奇談がある。十数年前の事であるが、イグアスー観光に、バスを仕立て出かけた事があった。ちょうど日本から客が三・四人来ていたのであるが、途中相当しっかりしたレストランで食事をした時、日本からの客の一人が、トイレに入って、用を済ませて出ようとするとカギの故障で戸があかない。叫んでみてもそとはガヤガヤして気が付かない。早く出なければ置いて行かれたら大変、と気が気でない。良く見たら戸の上が空いているので、何とかして乗り越して来たとの事であったが、錠前の故障も注意しておいてもらわないと困る。

この一文、ペンが、考えていた事と違った方向に進んでしまった。才能がないと、しかたのないものとお許しをねがって、初期移民のトイレの苦労を一寸記しておかないと、初期移民に申し訳が立たないと思う。然しその事に付いて書いた人は少ないのである。

一攫千金の夢をカフエーに托して、二ケ月前後の航海をすませ、希望と不安を祈り混ぜた複雑な気持で、やっと耕地に配耕された。各自の住宅は租末では有っても、屋根も有れば壁も有る家が当てがわれ、「翌日から作業だ」という事は、それで良いのであるが、その頃から、食べた物の粕が糞となって出て来るのである。

便所はどこだと、捜してみても、どこにも見あたらない。外人たちの家の廻りを見てもないのである。

私は、耕地の生活は経験がないので、言えないのである

が、経験者の話しは良く聞いているので書けるのである。
小作人の家や労働者の家に、トイレのある家は、当時の耕地にはなかったのである。
外人たちはともかく、一等国民と、誇りを持っていた日本人にはたえ難い事であった。
翌朝から仕事といわれても、トイレ無しに仕事に行けるか、と、先づトイレ作りをしたであろうが、何日間かの不自由はしいられたのである。
外人たちには、豚小屋の上に板を二枚渡して、上で用をすると、下で豚共が食べていた、などという話しもきいた。とに角、初期の移民は耐えがたい、恥ずかしいトイレなしの何日かを経験せざるを得なかったそうである。

第二十七話
見合い

私が三十才の頃、思わぬ幸達に恵まれて、本家から分けて頂いた財産が一辺に本家の十倍以上の生産をあげる事になった。一時は詐欺にだまされているのではないかと、二晩三晩ねむられない夜もあったが、総ては順調に運んで、払う物は払い、正当な地権を譲渡されて安心した。
そこで、本家との財産の大差を何んとかしなければと考え、初年度の収穫で、楽に払える借金の肩替りをして貰うこ

とにして、本家から頂いた土地を返すと、兄も大変喜んでくれたのであった。本家の財産も一度に三倍以上になった。

これで兄弟四人大差の無い財産になった上、今迄の三倍四倍と収穫をあげる事になったので、落ちついて居ればよいものを、調子に乗って更に或る地方に、我が家としては広いマット（原始林）を買って開拓を始めた。

と、そのすぐ隣りを同船者のアプカラーナの宮崎様が、広く政府より払い下げして既に開拓に取りかかっていた。

その宮崎様が、広い土地の一部を十アルケール（アルケール＝二町四反余）位を単位に切り売りされたらしく、その一劃を買って入植していた人に五、六人の青年がいて、嫁さんを一人世話をして欲しいとの事で気にかけていた。

すると、或る時、ジャンダイヤの町から分れて三十Ｋｍ余り入ったところに、年頃の娘さんを二人持っている、まじめな農家のある事が解った。その親戚が、ロンドリーナ郊外にいて良く知り合いなので、真じめな事は間違いないと安心が出来たので、事情を吾げて、色々と話し合っていると、その家族は渡伯する時の同船者という事が判ったので「懐かしくて遊びにきた、」という事で行って、目的の娘を一度見てこようという事になって、私のヂーピ（ジープ）で出かけた。

私は、此の人達がロンドリーナの親戚の処の結婚式や何かに来ているので、親の顔は覚えているのであるが、娘の顔は知らないので、此方の親戚から仮に、姉は秋ちゃん妹は夏ちゃんと聞いて行った。

さて当家について、先ずは『此の人、私の耕地の隣りに住

んでいて、1さんと言って、あなた達と〇〇〇丸で二緒に来た人で懐かしいから案内して欲しいーーと、いわれるので遊びにきた旨を伝えて雑談になった。母親は既に早くからの未亡人で、長女には親戚から婿取りをしていて、その人を私は良く知っていた。

遊びに来たと言っても青年を一人達れて行っているので、娘を見に来ているのに気がついたのか、娘が一人お茶とお茶菓子を持って来てくれたが、それだけで一晩泊ったのに後は顔を見せないし、一度出てきた時、母親が『マリーヤ、お茶持って来て…』と、呼んだ。

秋子、とか、夏子と呼ばないで、ブラジル語で呼んだので、姉か妹か分らない上、それっきり一晩泊ったが出て来ない。次の日のトマ・カフエー（朝食）の時も顔を出さないので、仕方なく帰る事になった。ところが帰ろうとしてヂーピに乗って鍵を入れると、どうしても火が付かない、それで下方の野菜畠に向けて、坂道を転がして見たがつかない、家から二、三十ｍの処で後は道もないので、仕方なしに修理する事になって、二、三十分いぢくり廻していたら、何がどうなっていたのかわからないままに火が付いて帰る事が出来た。

車の中で『どうも思うようでない事になってしまった。娘はなかなか出て来ないし、たまたま出てくれば『マリーヤ』なんて呼んで、姉か妹か分らないし、もう一度はつきり見に行くと通知して置いて行きましょうか』と、言ってみて驚いた。『あの娘さんなら貰いたいです。そうお願いして下さい』と、いうのである。

それで、どうして確認出来たのかと、聞いて見て解かった事であるが、車が故障してくれたので、家の下方に行って修繕している間に、娘が裏側の窓から此方を良く見てくれたのではっきり分った。あの娘なら貰いたい、という事で仲人を引受けて成立した事があった。

こうした事もあって、見合いに私は不思議な魅力を感じている。

恋愛結婚に比べて、その離婚の率は何うなっているものであろうか。長い間の恋愛の後の結婚にしても相当に離婚している人がいる事を見て、見合い結婚も馬鹿には出来ないものと思っている。

第二十八話

エウドラードス

先日、大正時代に移住した人の話に、ファゼンダに配耕されると、そこにはまだドレイが何十人もいて、毎日武装した監督の元で働いているのを見たと言う人がいた。

若い時の私なら、ドレイ開放されてから相当の年月が過ぎているので、そんな事はない筈と反撥した事と思うが、エウドラードスの事を知ってからは、その事実はあったであろうと肯定できるのである。

一九四九年のカフェーの暴騰から未だ好景気が、続いて六

〇年代に入ったが、国民の思想が政府自体から左傾して、全く嫌な時代になって、これじゃあ全く共産主義ではないかと思はれる様になってきた。しかし六十四年の三月三十一日、カステーロ・ブランコ将軍の革命が勃発して赤化は喰い止められて助かった。

ところが此の革命でエウドラードスが開放された、という噂さを耳にした。

『エウドラードスとは何か』と、重ねて尋ねると、一人の地主が昔の日本の殿様のように、広い土地を持っていて、その中で生活する者は、外部との接触が自由でないのだ。

通貨も、昔の殿様の発行した藩札の様に、社会に通用しない特別な物を使用し、外部に出る時には地主の事務所で両替しなければ出られない事になっていたというのである。

それではそのエウドラードスとは何処に有るのかと尋ねると、日本人の大勢入植しているグワラペーラ植民地から十五Ｋｍ位の処だ。いつでも案内してあげるよ。と言はれるので、一日、案内してもらって、弟たちと尋ねた処、その城下町は三十軒余りの小さな村で、いわば寒村であった。

唯相当な木工場のあったのは、その附近からマウア方面の松材を集めて、製材して輸出をしていたものであろう。農産物の充分にとれる良質の土地ではなかった。

それでも相当な収入はあげられたらしく、地主の住宅は、当時の一般から見ればお城と言いたいほど立派な建造物であった。

内部を見せて頂いたが、建築の主な材料や家具、カーテン

等、殆んどイタリヤから運んで来たとの事で、大変豪華なものであった。

貨幣の事は一寸前述したが、尚少し書き加えると、単位をポルオーラ（一時間）と名付けていた事は、一時間の仕事代をお金の単位としていたのであろう。

私はそのお金を捜したが、二枚見つけただけであった。革命の時、此の組織は解体されたのであるが、その時取替えて置かないと、無価値になるのでみんな取替えてしまったという事であった。

それは昭和三十九年の事であるから、大正時代では、労働者をドレイの様に働かせていたと言う事はうなずけるのである。

今でも、パラー州やアマゾーナス州になると、五百Ｋｍ、一千Ｋｍと道もろくにない処では、行政の行き亘らない処もあるのではないかと思はれる。

ジェット機で、一時間も二時間も飛んでも、森林の続く処では、力の有る者の無理が通っても、又、それによって小さな者が守られても行くので、エウドラードス的な組織が出来るのが当然かも知れない。

今、思い出すのであるが、私も四十五年程前急に労働者を多く使用する様になって、勘走日以外は、バーレと言って、いわば代理貨幣を印刷して来て使用した事があった。あれが若し、もう少し原始林の中の、不便な処であったら、エルドラードスの様な事になっていた事であろうから、アマゾンの森林の中に行けば、今でも、同じ様な事があっても不思議で

はないのである。
とにかく、ブラジルは、大きい国、末来の国、夢の国、若い者には希望一杯に働ける国である。

第二十九話
味覚

人間を始め、普通の動物は大抵舌を持っているので、食物を食べる時に舌で先ず味を見て、その上温度を感じ乍ら、うまいとか、まずいとか、熱いとか、冷えているなどと思いながら食べているかと思っていた。然し、よく考えてみるというか、良く観察してみると、そうとも言い切れない動物がいる。例へば、蛇が蛙を食べるのを見た事があるが、蛙を頭から飲み込んでいくのである。
噛み砕く様な歯は無い様であり、二本の前歯は噛むというより、後方、即ち喉の奥に向って曲っているので、食べ物を丸飲みし易くしており、一旦口に入った物が逃げようとしても、奥向きのキバがささって逃げられない様に出来ている。
餌は自分の胴体より随分と太い物を丸飲みするのであるから、舌の上を通る時に、味見は出来ないと思うのである。
鶏の卵を飲んだ時など、丸い卵がそのまま入っているのが良くわかる、卵を丸飲みしていてその味が解る筈はないと思

うのである。
又、魚類にも良く他の魚を丸飲みにしている魚がいるが、この場合も口で、(舌で)　味見をしていないと思う。鯨など一口に大量の小魚を飲み込むという事であるが、これも舌で味見をしてはいないと思う。
然し又、考えて見ると、口に入った時、食べて良い物か、味の良い物かどうかが分らないと困ると思う。
冒袋に入って消化が始まってから、これは不味い物を飲み込んでしまったと解るのでは気の毒である。
鶏などでも、ミーリョ　(トウモロコシ)　等を粒のまま丸飲みするが、どこで味をみるのであろうか。
私は歯が弱く、若い時から治療をしていたが、それでも、いよいよ親に頂いた歯と最後の別れをしたのは六十五・六才の頃であった。最後の一本に尚期待をかけて、入歯をそれに引っかけていたのであるが、一本になっては無理がいくので、長く持てずぐらつき出して、終いには涙の別れをしたのであった。ジエーロ　(婿殿)　が名歯科医で、出来の悪い歯ぐきになんとかして総入歯を持たせてくれて助かった。
ところがである。総入歯を作って間もなくの事であった、家族揃ってアイスクリームを頂く事になった。
私は年甲斐もなくと言はれても仕方がないほどアイスクリームが大好物である。
それで期待して一サジ舌の上にのせたのであるが、ガックンときた。それは全く予期出来ない事であった。
何が来たかと言うと、あの冷たい筈のアイスクリームを、

我が舌は冷たいと少しも感じてくれないのであった。即ち私の舌は味の判断はしていたが、温度の判断は下していなかったのである。

私は此の自分の舌の能力を、六十代も半ばを過ぎて始めて気が付いたのである。

ところがである。再び一年二年すると、同じ入歯をしていて、アイスクリームの冷たさを元通りに感じるようになってきたのである。有難い事である。

これを良く考えてみると、ハサミを取られたカニには、再びハサミが生えてくる、しつぼを取られたトカゲに再びしっぽが生えてくるという事と同じ事である。

有難いものである。これも神様の働きかと思いたい。

(註) 始めは上アゴで冷たさを感じていたものを、入歯のアゴで上をふさいだので、温度を感じ　ないのでは、かわいそうと、今度は舌で感じられる様にしてくれたのである。

再びソルベッテ(アイスクリーム)が冷たくおいしく頂けるので有難い。

第三十話

玉味噌

味噌についてはそれ程苦労をしなくても近くになんとか作れる人がいて助かったようであるが、それでも、移住した処が、邦人の少ないファゼンダであったり、又は、町ぐらしの人でみそ作りなどに縁の無い人ばかりの処では、やはり味噌でも苦労していた事は事実である。何事でも話しで聞いただけで見た事も、した事もない事をしようとするのは大変な事である。これはロンドリーナの草分け時代の実話である。

此の人は福島の生れで、北海道へ子供の時に親に連れられて移住し、子供の時から奉公に出て、移住者の家の中の仕事の経験の無い人であった。

その人がブラジルに移住し、苦しい生活の連続の中でロンドリーナに移って来たのであった。

やっと落ち着いて、大豆も取れたので味噌を仕こむことになったというのである。二　三家族の近所の婦人方に聞いてみても若い移民の女たちは、誰も経験がない。そこでよしきた、俺が、昔々親が作っていた事を少し覚えているから、やってみようと、いう事になった。その人は、五〇才位の人であった。その人の妻は、少し頭の弱い人でそう談相手にならない様であった。

そこで、その人が言うのに、先ず大豆を煮て、煮えた大豆を汁からあげて、水を切ってから、子供の頭位の大きさのだ

んごに作るのだそうだ。大豆であるから、にぎりめしの様に簡単に、にぎれるものではなく、苦労したらしい話を私は父母の脇で聞いていたのであった。彼は福島で見た、玉味噌の作り方を思い出して作ろうとしているらしいのであった。

物置に板で棚を作って、やっと丸めた大豆のかたまりを、その棚の上で陰干しにする事にした。一週間程して行って見ると、玉はくずれて、一面にウジが湧いていてびっくりし、早速キント（樽）に入れて沢山の塩を混ぜ込んでおいたが、腐って嫌な臭いがしていたものが、半年程したら臭みは消えてうまくなっていて食べられたと言う話であった。

私は聞いていて良くも辛棒して食べたものだと感心した。場所の悪い処に配耕された移民の嘗めた苦労は、とても我々の想像出来ないものであったらしい。此の味噌にしても、一旦いたんで蛆が湧いたからには、如何に仕込んでも相当数の蛆の死がいはあったろうが、炊事する人がペネリンニヤ（アミジャクシ）ですくい取ってくれたのかも知れないが、一寸は食べる気がしない筈のものである。

ここで少し福島地方の人にきいて見たいと思う事は、此の人が語っていたような玉みその作り方というものが、本当にあるものかという事である。此の人の話では丸めて陰干しにして、干し上げてから樽に仕込んで味噌を作るという。仕込む時、丸い塊りになっているので臼でついてくずして仕込むという。日本の晩秋に干すなら、お天気と寒さで腐る事もなく干し上るのかも知れないが、暖かい、当地では無理な方法であった。

第三十一話
バクチ的農業

移民の大半は、新聞紙上で言われる程の大げさな物で無くとも、一攫千金、錦衣帰国の言葉の様な気持ち、即ち、何とかして早い時期に故郷に帰りたい希望は持っていた。

誰か故郷を思わざる…と、歌の文句の通りであり、従って移民は良く働いたのである。

三角ミーナスからアララクァラ線モジアナ線ノロエステ線と南下して来たコーヒーの栽培が、パウリスタ線、ソロカバナ線に入って来てその土地の弱さと、コーヒーの価格の暴落で、少し下火になっていた上に、カフェーの植付制限令が出てサンパウロ州では植付禁止になっていた処へ、棉作が脚光を浴びて来たらしく、それは、ちょうど、アメリカのカリフォールニア等も、金が産出する事になって、ここでいうガリンペーロ（金堀り人夫）等がワンサと集って来て、あの大都会のサンフランシスコやロスアンゼルスが出来たと言う事であるが、サンパウロ州のノロエステ沿線、パウリスタ沿線、ソロカバナ沿線等の発展は、綿の景気に合せた様に、多勢の日本移民が渡って来ていた為に出来た現実と言えると思う。

即ちオーローブランコ時代を迎えるのである（オーロ・ブランコ時代＝白い金という事で棉の時代という事。）それも自分の土地を購入して植える者よりパスト（牧場）造成

を希望する大地主と契約して二年の借地料の代りにデルバ・マット（原始林の伐採）をして終りの年に牧草の苗を植えて、返すという様な条件が多かった様である。

当時国際植民地まで、視察に来ながらも、カフェーは四年かかる上に霜の恐れがあるが、棉作は勝負が早いので面白いと言う人が何人もいたのであった。

それで棉作で一当てすると、翌年は、その儲けを資本にして倍の面積を作付けするという、いわゆるバクチ的栽培になって行くのであった。

棉作は勝負が早い、植付けて二ケ月もすると蕾をだしてくるので商人からの青田貸しが受けられる上に、その後四ケ月もすると勝負が決り、儲かれば翌年拡張の為のデルバ・マット（森林の伐採）をする期間は十分にある上に、畠を、僅かのフォルネッセ（生活費の貸出し）で歩合で作る家族も充分にいたので調子が良ければ倍増々々と出来たのであるが、その内に凶作にあって、元の木阿弥に戻る者も多かった様である。

当っている内は自信がついて大丈夫と思うらしく倍増々々と日系人の一かく千金の夢の前に相当広い面積の森林が開拓されたのである。

私達の入ったパラナ州のテーラ・ロッシャ地帯は地質が良かったので何十年と落ち着く事が出来たが、それでも、ひと儲けしたい希望はあり、それがカフェー景気にあおられて一面バクチ農業とも言える状態に押しまくられた時代が二・三

十年位はあった事がある。但しパラナのカフェー栽培は白分の土地を購入しての事であったので、棉作のバクチ農業のように浮き腰な事業ではなかった。しかし、医師から弁護士、一般商人、写真屋さんも床屋さんも、小間物屋さん等迄が、契約者を雇ってカフェーの栽培を始めたのであるから、バクチ農業の一面があった、事には変りはない。

思い出しても怖ろしいのは、或る産物が景気に乗った時である。それはちょうど蟻の巣をつぶした時のように空いている方に向って急激に開拓が進められるものだ。

道具はフォイセ（大鎌）とマッシャード（マサカリ）の時代でも音を立てる様にして開かれる八月九月になると山焼きの煙で太陽の見えない日が続くのであり、ムダンサ（引越し）が陸続として、パラナ独特のあの有名なポエーラ（土ホコリ）を吹き上げながら続いて来るのである。

それが日系移民の全盛期とぶつかったため、嫌が上にもバクチ的農業は、盛んになったが、また思いがけない成功者が出たということもあるから、『バクチ農業と移民』の題名を悪くだけ取る様な事の無い様に願いたい。

北パラナのコーヒー栽培は、堅実な歩みを続けていた、四十二年の大霜害には、全滅的な大被害を受けたが、その規模が小さかったので、枯木になったカフェーの木の根元から出て来る芽を育てながら、広く空いた株と株の間に種々の作物を植えて生産をあげるので、生活に困る事はなかったのである。

それが四十九年になると、コーヒーの収穫中にボツボツと

値上がりして、収穫中に倍の値段になって、それが翌年になっても、下がろうとしないのである。いや下がるどころか、それが二十余年続いたのである。

経営費は三割か、四割で、六割も七割も丸残りであるから、何か起きないのがおかしい。

五アルケールか、十アルケールの地主が、立派な住宅を建てる、新しいトラックを買う。サンパウロ郊外の宅地を、現地を確めもせずに、誰も買った、彼も買ってくれたという話に乗って、私も買ったよ、というような話が続出した。

マット・グロッソ州の道も無い処の土地を地図の上だけで買った人も、私の親戚の中にも何人も居る。

マリンガから、グワイーラへ、イグアスーへ、と、パラグワイ、アルゼンチンの国境迄の広大な面積の森林を切り倒してしまったのも、此のカフェー景気の一九五〇年頃から七十五年にかけての事であった。

七十五年の隆霜を受けて、せめて収穫した物の値段でも盛り返してくるかと、保存してみたが、値は出てこないまま、パラナ、サンパウロ方面のカフェー景気、即ち時折降霜の有る地帯のカフェー生産の面白い時代は、終りを告げたのであった。然しそれでも「夢よ、もう一度。」という期待からか、カフェー生産を続ける人、又、畠の一部に残している人もいるが、全体としては、往時の一割にも及ぶものではない。

又、南パラナを主に馬鈴薯（バタタ）作りも相当にバクチ

農業らしい様相を呈していた様である。当れば大きく儲けるが、はずれて借金となると、これ又思いがけない肥料その他経費の掛るものらしく、「バタタの借金はバタタでなければ払えない。」等と言われたもので、多分にバクチ的要素は持っていたが、一攫千金を夢見ている移民には魅力があったから相当数の移民が、やってみた仕事である。

一儲けして、帰国したい夢を持って来た移民は相当の無理な事もしたが、あのエネルギーが、殆んど無一物の移民に今日の日系社会を築かせた事を思う時、今の二世、三世達にあの当時の情熱の一端でも伝える方法が無いものかと考えさせられるのである。

ちなみに、私の家族は知り合いがバストス方面に移住して来ていたのでバストス方面に一時棉作りに行って見ようかと家族の話に出る事もあった。又、ルア・セルジッペで理髪店の緒方氏はカッポン・ボニート脇のイタペーバ方面に棉作りに行きたいと計画を練って店を売った事があったのである。

買手が金を持って来るのが少し遅れた為に、山伐りの時期がおくれたので一年延ばすと、その年は収穫にながの雨が来た上に、新らしい害虫が発生して棉作者の大方が大変な打撃を受けたので緒方氏の棉作への移転はとどまったのであった。

緒方氏が、イタペーバ方面に行きたかった理由の一つには、彼と北海道から同じ船で来た、人達がイタペーバに移って棉作で調子良くやっていたからであった。

独身で来た緒方氏であるから、移民としての渡伯上、家族構成で連れてきてくれた家族なども居たのではないかと思わ

れる。
然しあのヤセタ、四十Ｋｇ余りの体重の、どう見ても百姓向きとは思えない彼が棉作を考えた事があると話しても、その話は信じられないと言う人ばかりであるが、私は彼自身から或る日しんみりと、当時の様子を聞いたのである。その彼も近年九十余才で、寂しく亡くなってしまった。
彼は移住するとき、一人残してきた母親に、「一儲けしてきて、母さんに一軒の家を建ててやろう。」と約束して来たのであったが、母親は案外早く亡くなったので、約束が果せず、その為に私は世間の人の様に自分の楽しみに訪日は出来ないのだと言はれていたが、彼が棉作に行こうと計画した時は、まだ母親が健在であったのかも知れない。
それにしても、四十Ｋｇそこそこの独身の彼に、ジヤングルを借地して、棉作りをさせようとした、力は何んであったのかと考えさせられる。
とに角あの時代は、移民をジャングルへ、ジャングルへと向わせる、力が働いていた。
そして、そこには、他人の土地をアレンダしてのバクチ的棉作りもしたけれども、戦争前の僅かの間に儲けて帰国した人もいたのである。
尚ジャングルへジヤングルへと、フォイセ　（大カマ）と、マッシャード　（マサカリ）　をかついで入って行った移民は、殆んどが地主となって落ち着いたのであるから、幸せであったと共に立派であったと称えたい。
戦争に負けた為に日本語の話せない子孫が出来たが、早く

日本が復興してくれたので、その底力を認識する子孫の者達は再び日本人らしい姿を復活させてくれるであろう。その初期においては、生産物に押しまくられて、多分にバクチ的経営に入る事も有ったが、僅かの期間に、僅か二十万人余りの一世移民が、百万アルケール、三万平方Ｋ　ｍ前後の開拓をしていたのであるから、二〇世紀に入って来たばかりのブラジルの発展の為に相当な貢献をしている事にもなる。そして、その人口は排日的二分制限案などにいじめられてブラジル総合の僅か〇・二％程の移民の仕事であったのである。

今日では子孫が増えて一％に近づいているがそれからしても、日系人の活躍は、ブラジルに対して一％位の影響ではないのである。

出稼ぎにしても、その持ち帰る金額が、ブラジルのカフエーの総輸出額に匹敵しているとの話が有り、又、移民が持ち込んだ、野菜、果実の四十種類を越える生産物が、当国人の健康に与えている、その影響は計り知れない物が有る。

こうした自然の内に、国家に、国民に貢献している幾多の事情が、その基盤となって、日本人移民の子孫は発展して行くものと信じ、私は二十一世の移民の活躍を期待している。

これがエネルギー不滅の法則と言うものであろう。

あとがき

印刷にすると、口でお話ししているのと違って、色々と批判されるものだから、覚悟をして置く様にと、友人に注意されて、それはそうであろうが、私の場合どんな批判がくるかと心配して居ました。

いよいよ発行してみると、心配していた批判はなく、大変面白い、昔を思い出した、訪日のみやげに五十冊分けて欲しい。次を待っている等々、三百名余の他人から、次々と楽しい、励ましの便りを頂く事になり、第四冊目が出た頃から、サンパウロの書店に扱って頂く事にして居りますが、思いがけない事になったものと少し驚いて居ります。

調子に乗って良い気になっていると、それこそ何が起るか解らないので、ぼつぼつ種も切れてきた此の辺でお別れして置くものと考えます。

第十部迄の長い間のご愛顧御声援どうも有難うございました。厚く御礼申し上げまして、又、私の挿絵を最後に亡くなって逝かれた牛窪氏に深く感謝申し上げると共に、厚く御冥福をお祈り申し上げます。

これを以ってお別れの言葉と致します。

数年に亘って御愛読下さいました皆様方には、今後共健康に気を付けられて、長く楽しい人生をおくられます様お祈りして居ります。

著書　沼田信一　略歴

出　生　大正七年（1918）四月十五日
北海道札幌市北二条東一丁目に生る

学　歴　札幌市第一高等小学校卒

渡　伯　昭和八年（1933）7月サントス上陸，アリゾナス丸
直接海外興業株式会社拓殖のセッテ・バーラス植民地マンバウロ区へ入植、翌年5月パラナ州ロンドリーナ市郊外中央区へ移転、1942年フレーザ区へ移転、1950年ローランジャ郡内へ移転、1953年ロンドリーナ市内に移り今日に至る。

職　業　渡伯後一貫して農業　現在は主作としてアルコール、砂糖生産の為砂糖キビ栽培

既刊

第一部	カフェーと移民	発行1996年 4月
第二部	ピンガと移民	発行1996年 9月
第三部	毒蛇と移民	発行1997年 3月
第四部	ムダンサと移民	発行1997年10月
第五部	赤土と移民	発行1998年 7月
第六部	ビッショ(砂ノミ)と移民	発行1999年 6月
第七部	霜（ジェアーダ）と移民	発行1999年12月
第八部	戦争と移民	発行2001年 5月
第九部	風土病と移民	発行2001年 9月

第十部　ジャングルと移民

発　行　2002年1月　初版発行

著　者　沼田信一
SHINICHI NUMATA
Rua Raposo Tavares, 828 - Londrina
Est. Paraná - Brasil - Caixa Postal 860
CEP. 86010 - 580 - Tel : (43) 322-1740

印　刷　Editora Gráfica Topan-Press Ltda.
Rua Muniz de Souza, 655 - S. Paulo
Tel : (11) 3209-5522 Fax : (11) 3207-3975